

# 中古文学資料解題②

星 瑞 穂

はじめに

本稿は、『北の丸』第四九号に掲載した拙稿「中古文学資料解題①」に続くものである。

当館所蔵の資料のうち、平安時代に成立した文学作品（中古文学）および後世に成立したその注釈書について紹介するものである。当館には多くの写本・版本が所蔵されているが、広く一般の利用に供するため、書誌情報・作品解説を加えて掲載する。

今回は『改訂 内閣文庫国書分類目録』から「国文」の項目に挙げられている資料のうち、平安時代に成立したもので、およびその注釈書類を抽出して調査した。なお、このうち挿絵を伴うものについては、すでに『北の丸』四五号（平成二五年）～五〇号（平成三〇年）に「当館所蔵の「絵入り本」解題①～⑥」として紹介している。

【四八】「源氏物語」 写年不明 一冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号特〇四八・〇〇〇三」

本資料は昌平坂学問所旧蔵の『源氏物語』の写本で、「葵」のみ伝わって

いるもの。綴葉装。一冊。

本文料紙は斐紙、題簽には金泥で霞が引かれており、いわゆる豪華本の範囲に入るもの。本文の筆跡も美麗である。

印記は「昌平坂学問所」墨印および「大学校図書之印」「浅草文庫」「日本政府図書」の四種が押印されている。「昌平坂学問所」印のみ見返しに捺されており、ほかは一才。

表紙は金茶色唐草文様（織）表紙だが、裏表紙は失われたと見え、砥粉色の表紙で補ってある。

【書誌】

外題・「あふひ」中央金泥雲霞文様料紙題簽（一四・〇糎×三・〇糎）に墨書

内題・なし

表紙・金茶色唐草文様（織）表紙（二三・三糎×一七・〇糎）

料紙・斐紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一〇行

字高・一八・五糎

墨付丁数・五九丁

印記・見返し「昌平坂学問所」（墨印）、一才「大学校図書之印」「浅草文

庫「日本政府図書」

【写年・書写者】

裏見返しには墨書で「右あふひ零本一冊は正親公光卿ノの筆也と古筆了悦いへり」と書き込みがある。古筆了悦は幕末から明治期の人で、古筆宗家第一二代。「正親公光卿」は江戸時代前期の公卿である正親町三条公統(初名を公光)を指すか。古筆家の極印もなく、極札もないためこの記述には疑いが残る。

本資料の筆跡や体裁から想像するに少なくとも江戸時代前期の写である。裏見返しの書き込みは幕末から明治期のもの。極札は伝存しない。

【四九】〔源氏物語〕 写年不明 一冊

蜷川家旧蔵「請求番号古〇一七〇三三六〇」

本資料は蜷川家古文書として当館に伝わる『源氏物語』の写本で、「若菜」の下巻のみ残る。写年不明。

元表紙の上からさらに新しい表紙が付けられている。元表紙は香色(二五・七糎×一八・〇糎)で、左肩に四周双边の刷題簽(一五・六糎×四・〇糎)が貼付されている。外題は「源氏物語抄」と墨書されているが、万年筆で「抄」が消され、その横に「わかな下」と補筆している。その上から付けられている代赭色表紙(二五・七糎×一八・〇糎)も左肩に四周双边の刷題簽(一六・五糎×三・五糎)が貼付されており、「源氏物語抄 二」と墨書されているが、赤鉛筆で「わかな下」と補筆がある。小口にも「源

氏物語抄 二」の墨書があり、同じ蜷川家旧蔵の『源氏物語抄』(請求番号古〇一七・〇三三六イ)のツレとして扱われていたと思われる。

全体に虫損あり。

印記は「日本政府図書」のみ。

【書誌】

外題・「源氏物語抄 二／わかな下」左肩四周双边刷題簽(一六・五糎×三・五糎)に墨書・赤鉛筆(改装表紙)、「源氏物語抄／わかな下」左肩四周双边刷題簽(一五・六糎×四・〇糎)に墨書・万年筆(元表紙)

内題・なし

表紙・代赭色表紙(二五・七糎×一八・〇糎)(改装表紙)、香色表紙(二五・七糎×一八・〇糎)(元表紙)

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一〇行

字高・二一・五糎

墨付丁数・九四丁

印記・一才「日本政府図書」

【写年・書写者】

本資料に奥書はなく、写年・書写者は不明。体裁や筆跡から江戸時代初期の書写と想像される。

【五〇】源氏物語奥入 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇一二」

本資料は藤原定家の記した『源氏物語』の注釈『奥入』の写本。写年不明。一冊。和学講談所旧蔵。

『源氏積』に続く『源氏物語』のごく初期の注釈である。奥書に「非人桑門明静」の署名があることから、定家が出家した天福元年以降の成立と考えられている。元は『源氏物語』写本の各巻の末尾に書き加えていた注記で、これが写本の借覧をきっかけに流布してしまったため、別冊としてまとめなおしたという。

内容は『源氏積』を引き継ぐものだが、独自の批判を加えている箇所も多い。

なお自筆本が現存しており（個人蔵）、これを中心に本文系統については整理が試みられている。（池田亀鑑『源氏物語大成』巻七、一九五六、中央公論社）なお、現在ではこの自筆本の内容を汲む「自筆本系」のほか「源語古鈔系」および本資料の流れを汲む「内閣文庫本系」の三つに分類され、久留米市立図書館蔵本等が本資料と同じ系統に分類されている。（新美哲彦「定家『奥入』の諸問題」『中世の学芸と古典注釈』竹林舎、二〇一一）（同「内閣文庫系『奥入』諸本の位相と分類」『平安文学の交響』勉誠出版、二〇一一）

印記は「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」「内閣文庫」の五種で、「内閣文庫」印のみ、本文冒頭と末尾の二箇所には捺されている。

【書誌】

外題・「奥入」左肩無地料紙題簽（二八・五糎×三・三糎）に墨書  
内題・なし

表紙・香色表紙（二七・五糎×一九・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一〇行

字高・二〇・〇糎

墨付丁数・七五丁

印記・一才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」「内閣文庫」

七五ウ「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料は写年・書写者に関しては不明。

【五一】紫明抄 写年不明 一〇冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号特〇一〇・〇〇〇四」

本資料は『源氏物語』の注釈『紫明抄』の写本。写年不明。一〇冊。袋綴。紅葉山文庫旧蔵。

『紫明抄』は鎌倉時代に成立した河内方による注釈書である。著者である素寂の父は、河内本『源氏物語』の校訂者で『水原抄』の著者である源

光行。兄は河内方本流に当たる親行。

内容は『源氏釈』『奥入』など初期の注釈を受け継いだ上で、河内方での論議を元に問答形式を多く取り入れ、故事出典などを明らかにしている。但し、その一方で、河内方本流の説とは対立する箇所も多く、素寂は本流を離れ河内方分派を為したと考えられる。後世に大きな影響を残し、『河海抄』『仙源抄』などにも引用されている。

三冊本、五冊本、一〇冊本があるが、本文系統としては、初稿本系統、京都大学本系統、内閣文庫本（本資料）系統に分類される。（田坂憲二『源氏物語古注集成一八 紫明抄』「解題」おうふう、二〇一四）

【書誌】

外題・「紫明抄 一（く十）」左肩無地料紙題簽（二七・六糎×三・三糎）に墨書

内題・「紫明抄」

表紙・代赭色表紙（二七・三糎×一九・二糎）

遊紙・一丁（①遊紙ウラ「日本政府図書」蔵書票貼付）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉九行

字高・二一・〇糎

墨付丁数・①三六丁、②五五丁、③三四丁、④三五丁、⑤三二丁、⑥三〇丁、⑦五九丁、⑧三八丁、⑨四六丁、⑩四〇丁

印記・①く⑩一才「日本政府図書」「内閣文庫」、①く⑩本文末尾「内閣文庫」、②⑤⑦⑩本文末尾「日本政府図書」

【写年・書写者】

本資料は写年・書写者に関しては不明。

【五二】紫明抄 写年不明 三冊

和学講談所旧蔵「請求番号二〇三・〇〇二一」

本資料は和学講談所旧蔵の『紫明抄』写本で、独特の本文系統を持つ三冊本。袋綴。

『紫明抄』の本文系統は内閣文庫本（請求番号特〇一〇・〇〇〇四）系統と京都大学本系統とで分類されるが、省略本である三冊本（本資料）については、初稿本系統として別に扱われる。多くの項目が削除され、また誤写も散見されるが、他の系統に比べて先行する内容を持つ（田坂憲二『源氏物語古注集成一八 紫明抄』「解題」おうふう、二〇一四）。

各冊冒頭に捺されている「大澤侍従兼下野守蔵書」（四周双辺、陽刻朱印）は、幕臣の大澤基季のものである（『内閣文庫蔵書印譜』。基季は宝暦七年に家督を相続し、のち侍従、下野守に叙されている（『寛政重修諸家譜』）。

【書誌】

外題・「紫明抄 天（地・人）」左肩砥粉色唐草文様雲母刷料紙題簽（一九・三糎×四・三糎）に墨書

内題・「紫明抄」

表紙・浅葱色表紙（二七・五糎×一九・七糎）

遊紙・一丁

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一二行

字高・二一・〇糎

墨付丁数・①七三丁、②六六丁、③八六丁

印記・①～③一才「書籍館印」「内閣文庫」「日本政府図書」「和学講談所」

「大澤侍従兼下野守蔵書」、①～③本文末尾「内閣文庫」「日本政府図書」

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。

【五三】紫明抄 写年不明 一冊

林羅山旧蔵「請求番号二〇三・〇〇二〇」

本資料は『源氏物語』の注釈書『紫明抄』の零本一冊。林羅山旧蔵。袋綴。

『紫明抄』は三冊本、五冊本、一〇冊本などがあるが、本資料は「桐壺」から「末摘花」までの巻一部分の零本である。本文系統としては京都大学本系統に分類されるもの。(田坂憲二『源氏物語古注集成一八 紫明抄』「解題」おうふう、二〇一四)

扉には「紫明抄」の題のほか、「桐壺／箒木 空蟬 夕顔／若紫 末摘花」と巻名が書かれている。

表紙は左肩に「紫明抄」の外題が墨書されているが、その右横に同じよ

うに「紫明抄 完」と朱書がある。

本資料には「江雲渭樹」の印が捺されており、林羅山の手沢本であったことがわかる。この印は羅山の蔵書印として用いられたもので、羅山自身が使用したほか、前述の通り、羅山没後に鷺峯が使用したため、捺印の時期は不明である。

【書誌】

外題・「紫明抄」左肩打付墨書、「紫明抄 完」左肩打付朱書

内題・「紫明抄」

表紙・香色表紙(二五・五糎×二〇・〇糎)

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一一行

字高・二二・五糎

墨付丁数・七〇丁

印記・一才「日本政府図書」

一ウ「林氏蔵書」「江雲渭樹」「浅草文庫」

七〇ウ「日本政府図書」「内閣文庫」「昌平坂学問所」

【写年・書写者】

本資料は奥書を持たないため写年・書写者ともに不明。林羅山の手沢本であった点から見て、江戸時代初期の書写と考えることができる。

【五四】原中最秘抄 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵「請求番号二〇三・〇〇〇八」

河内方による『源氏物語』の注釈書『原中最秘抄』の写本で、特に花山院長親の手による抄出本（耕雲抄本）。袋綴。一冊。

『原中最秘抄』は源親行が『水原抄』を基に文永年間に記したものに、その子聖覚や孫行阿によって代々加筆して成立したとされる。書名は『水原抄』の中の「最秘」を記したものであるという意と考えられ、散逸した『水原抄』の内容を窺うことができる。

本文系統としては、行阿が加筆修正した完本と、將軍足利義持の命によって花山院長親が抜粋してまとめた抄出本の二系統があり、本資料は後者に相当する。

特徴としては多くの先行する注釈を引きながらも、『紫明抄』については許容しない態度を見せ、これは著者が河内方本流を自負し、『紫明抄』を記した素寂に対して否定的なためと考えられている。

花山院長親は南朝に仕えた人物で、その学才から後村上天皇や長慶天皇の信任を得、多くの著作を残した。南北朝が合一する頃に出家して子晋明魏と号したが、その庵号から耕雲とも称される。そのため抄出本は「耕雲抄本」とも称される。

本資料は和学講談所の旧蔵。

【書誌】

外題・「原中最秘抄 全」左肩打付墨書、朱書で「上下」と補筆あり

内題・「原中最秘抄」

表紙・香色表紙（二五・〇糶×一九・〇糶）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉九行

字高・一九・五糶

墨付丁数・六六丁

印記・一才「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」「浅草文庫」

【写年・書写者】

本資料には花山院長親の元奥書があるのみで、写年・書写者については不明。

【五五】仙原抄 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵「請求番号特〇六二・〇〇一三」

本資料は長慶天皇による『源氏物語』注釈書で、一般的な書名は『仙原抄』。弘和元年の成立（跋文）と考えられている。袋綴。一冊。

書名には「源氏物語色葉聞書之事」「源氏物語色葉抄」など別名が多く、現在一般的に称される「仙原抄」も花山院長親（耕雲）自筆本に基づくもの。「仙洞の源氏物語の抄」の意か。なお本資料の目録書名は外題に基づく。

『仙原抄』は定家自筆本や河内方の注釈書を参照した上で、「愚案」として自説を挙げる。特徴的な点は、語彙に注を施し、それをいろは順に分類している点である。また河内方や定家の説にも積極的批判を加える。

著者の長慶天皇は南朝の後村上天皇の第一皇子に生まれ、即位してのち

も吉野や大和の行宮を転々とした。本書を編んだのち、後亀山天皇に讓位して嵯峨に崩じたという。しかし、その在位期間に関する資料が乏しく、即位の有無については近世から議論があり、その論争に決着が付いたのは大正に入ってからのことである。

本資料は和学講談所の旧蔵。

【書誌】

外題・「仙原抄」 四周双辺刷題簽（二七・〇糎×三・〇糎）に墨書  
内題・なし

表紙・横刷毛目表紙（二七・二糎×一九・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉九行

字高・一九・五糎

墨付丁数・八〇丁

印記・一才「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」「浅草文庫」

八〇ウ「日本政府図書」「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者ともに不明。

【五六】統源語類字抄 慶安四年写 一冊

和学講談所旧蔵「請求番号二〇三・〇〇一〇」

本資料は猪苗代兼也の手による注釈書『統源語類字抄』の写本で、慶安四年の書写。袋綴。一冊。

『統源語類字抄』は伝本が極めて少なく、版本も確認されていない。京都大学文学部が所蔵する写本に唯一、元奥書があり、それによれば寛永一六年に猪苗代兼也という人物が編んだことがわかる。兼也は本名を佐久方広といい、会津諏訪神社の神職を務めた。一時、猪苗代家の家督を継いでいたことから猪苗代兼也と名乗っていたと推定されている。生没年・来歴ともにはつきりしないものの、『統源語類字抄』を編んだのは晩年であると考えられている。書名は『類字源語抄』に基づく。（岩坪健『源氏物語古注集成二一 仙源抄 類字源語抄 統源語類字抄』『統源語類字抄』解題）おうふう、一九九八）

『統源語類字抄』は、いろは別の形式をとる『源氏物語』の語彙辞典で、『仙源抄』『類字源語抄』に続く内容を持つ。自説については「私」以下に述べるが、詳細な比較・検討は見られない。

本資料は和学講談所の旧蔵。

遊び紙に昭和三年の年記のある附箋（二〇・二糎×八・四糎）が貼付されている。万年筆。内容は以下の通り。

「統源語類字抄。紹永本ト異ナル系統ノモノナリノ源語類字抄ナリ。蓋シ仙源抄ヲ単ニノ類字ト称シタルモノアリ（専順筆仙源抄）ノ故ニ統源語類字ト称シタルヤ。ノ統群書類従所収ノ源語類字抄ハ此ノ奥ニ惠梵ノ奥書ト紹永ガ仙源抄アリ抜粋シタル補遺アリ。ノ昭和三年二月下旬」

【書誌】

外題・「統源語類字」左肩打付墨書

内題・「統源語類字抄」

表紙・香色表紙（二六・五糎×一九・四糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一二行

字高・二〇・〇糎

墨付丁数・七八丁

印記・一才「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」

七八ウ・遊紙に不明円型墨印（直径一・八糎）

【写年・書写者】

本資料は七八ウに次の通り、奥書がある。

「于時慶安四辛卯年仲秋下旬」

【五七】河海抄 写年不明 一〇冊

林鷺峰旧蔵「請求番号二〇三・〇〇二二」

本資料は『源氏物語』の注釈書の集大成とされる四辻善成の『河海抄』の写本。二〇卷一〇冊。袋綴。林家旧蔵。

『河海抄』は貞治年間に足利義詮の命によって編まれ、献上されたと伝えられる。書名は、「河海不厭細流、故能成其深」（『史記』李斯列伝、『和

漢朗詠集』下）に基づく。

それまで『源氏物語』の注釈は河内方による系統のものや、『源氏釈』『奥入』のような部分的なものしか存在しなかった中で、『河海抄』は先行する注釈書を網羅的に踏まえ、総合的に批評を加えた画期的な大著であった。特徴的な点としては『源氏物語』が史実に立脚すると考える「准拠」論や、先行する注釈書のほかにも膨大な文献を引用する姿勢など。佚書・偽書を含む引用の姿勢などは近世期の国学で大きく批判されたが、本居宣長は『河海抄』を『源氏物語』注釈の第一と評しており、その国学への影響は大きい。

四辻善成は南北朝時代の和学者で、『尊卑文脈』によれば応永九年に七七歳で没している。順徳天皇の曾孫に当たり、臣籍降下して源姓を賜っているが、祖父が四辻宮を号したことから四辻善成と名乗る。本書の署名は「源惟良」となっているが、これは『源氏物語』の中に登場する光源氏の忠実な家臣である「惟光」「良清」の名前から採ったもの。本書を編んだのち、秘説をまとめた『珊瑚秘抄』を著している。

本資料は「弘文学士院」の蔵書印から、林鷺峰の旧蔵だったことがうかがえる。そののち昌平坂学問所に所蔵が移った。

【書誌】

外題・「河海抄 一之二（十九之二十終）」左肩無地料紙題簽（一八・二

糎×三・二糎）に墨書

内題・「河海抄」

表紙・香色表紙（二六・三糎×一九・八糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界



行数・每半葉一〇行

字高・二三・五糎

墨付丁数・①一四九丁、②七二丁、③二〇二丁、④六三丁、⑤八一丁、⑥九一丁、⑦八三丁、⑧六八丁、⑨五四丁、⑩六〇丁

印記・表紙「昌平坂学問所」

各冊一才「林氏蔵書」「浅草文庫」「弘文学士院」「大学蔵書」「日本政府図書」「内閣文庫」

本政府図書「内閣文庫」

各冊末尾「日本政府図書」「内閣文庫」「昌平坂学問所」

#### 【写年・書写者】

本資料は江戸時代前期の書写と想定されるが、正確な写年・書写者は不明。

【五八】河海抄 写年不明 一〇冊

内務省旧蔵「請求番号二〇三二〇〇一七」

本資料は前掲資料同様『源氏物語』の注釈書である『河海抄』の写本。

二〇巻一〇冊。袋綴。内務省旧蔵。

本資料は一〇冊のうち六冊の題簽が脱落しており、中央に墨書で外題が打付書きされている。③④⑤⑦の四冊には中央に秋草文様が紺色で印刷された題簽が貼られている。外題はこの題簽に墨書。

「明治十三年購求」の印があることから、内務省が購入したものであることがわかる。但し、各冊一丁目右下には、それ以前の旧蔵者のものと見

られる陽刻印（三・〇糎×一・八糎）が捺されている。

#### 【書誌】

外題・①②⑥⑧⑨⑩「河海抄」中央墨書打付、③④⑤⑦「河海抄」中央秋草文様刷題簽（一八・二糎×三・七糎）に墨書

内題・「河海抄」

表紙・紺色表紙（二七・〇糎×一九・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一〇行

字高・二〇・〇糎

墨付丁数・①一七丁、②六三丁、③八一丁、④五六丁、⑤六九丁、⑥六九丁、⑦八八丁、⑧六三丁、⑨五三丁、⑩五二丁

印記・表紙「昌平坂学問所」

各冊一才「大日本政府図書」「明治十三年購求」「日本政府図書」

「内閣文庫」不明陽刻印（三・〇糎×一・八糎）

各冊末尾「日本政府図書」「内閣文庫」「大日本帝国図書印」

#### 【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者は不明。筆跡などから見て、前掲資料の書写年代よりは大きく下ると考えられる。

【五九】花鳥余情 写年不明 一五冊

旧蔵者不明 「請求番号二〇三・一〇〇三」

本資料は一条兼良の手による『源氏物語』の注釈書である『花鳥余情』の写本。伝梶井宮堯胤親王筆。三〇巻一五冊。袋綴。

応仁の乱の混乱の中、一条室町にあつた邸宅や書庫「桃花坊文庫」を失つた一条兼良は、興福寺大乘院門跡となつていた息子の尋尊を頼り、その後のおよそ一〇年間を奈良で過ごした。『花鳥余情』はその間の著であり、文明四年に成立したと考えられている。

系統としては文明四年に成立した初稿本、その後大内政弘の求めに応じて送付した文明八年の再稿本、後土御門天皇の求めによつて禁裏に奏上した文明十年の献上本の三系統が数えられる。

本資料は文明四年の奥書から初稿本系統に分類される写本である。

『河海抄』の「残れるをひろひ、あやまりをあらたむる」と序文にあるように、『河海抄』を補う形で編まれたが、注釈の方法・物語への態度には大きな違いがある。兼良は特に『源氏物語』の歌論書としての側面を評価し、文脈・文意・文体を明らかにするため、語釈だけではなく長文の引用を多用している。また有職故実についても深く検証しており、出典を明らかにしようと考証する『河海抄』とは性格が異なっている。

本資料で特筆すべき点は、第一冊目の遊紙に古筆了延による極書の略写が付されている点である。

「花鳥余情之内／一三五六七十一二十三／梶井宮堯胤親王／伏見殿貞常親王男花園院為御猶子／一条兼良公同時人／書継／二八九十四十五／筆者不相極／外題／青蓮院尊純親王筆 承応以三人／右古筆了延書注略写」  
これによれば、巻一、巻三、巻五、巻六、巻七、巻十一、巻十二、巻十

三は、一条兼良と同時代の梶井宮堯胤親王の筆であるという。後花園天皇の猶子で天台座主。歌人として知られる。但し、本資料の筆跡から見て、近世初期を遡ることはないと思像され、信憑性には問題がある。外題は近世初期を生きた青蓮院尊純法親王としており、時代としてはこちらのほうが自然。能書として知られる。

外題は朱色料紙の題簽（一三・八糎×三・〇糎）に墨書され、左肩に貼付。一から廿九まで奇数のみ表記。表紙の中央には、『源氏物語』の巻名が副題簽（七・八糎×九・〇糎）に墨書されている。各冊の巻名は以下の通り。

- ①「桐壺／帚木」、②「空蟬／夕顔／若紫／未摘花」、③「紅葉賀／花宴／葵」、④「賢木／花散里／須磨／明石」、⑤「滯標／蓬生／閑屋／絵合／松風」、⑥「薄雲／朝顔／乙女／玉鬢」、⑦「初音／胡蝶／蛩」、⑧「常夏／篝火／野分／御幸」、⑨「藤袴／楨柱／梅枝／藤裏葉」、⑩「若菜 上／下」、⑪「柏木／横笛／鈴虫／夕霧／御法」、⑫「幻／雲隱／匂宮／紅梅／竹河」、⑬「橘姫／椎本／総角」、⑭「早蕨／寄生／東屋」、⑮「浮舟／蜻蛉／手習／夢浮橋」

蔵書印は「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」の三種のみで、それ以前の来歴ははっきりしない。

## 【書誌】

外題・「花鳥余情一（〜廿九）」左肩朱色料紙題簽（一三・八糎×三・〇糎）

内題・「花鳥余情」

表紙・浅葱色表紙（二六・〇糎×二〇・五糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一行

字高・二三・三糎

墨付丁数・①六〇丁、②四九丁、③四二丁、④五四丁、⑤四四丁、⑥六〇丁、⑦五六丁、⑧三〇丁、⑨四三丁、⑩四七丁、⑪三二丁、⑫三九丁、⑬三五丁、⑭三七丁、⑮四四丁

印記・各冊一才「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」

各冊末尾「日本政府図書」「内閣文庫」

### 【写年・書写者】

本資料は、諸本に共通する一条兼良の奥書「文明四年龍集壬辰除月上澣桃華居士七十一歳志焉」のほか、「此抄卅卷池田若狭守正種用愚本所書写也依所望書銘返遣畢／文明十二年正月廿四日 桃華老 在御判」という識語が記されている点が特徴的。これによれば文明一二年に池田正種が『花鳥余情』を書写し、銘を求めてきたので兼良が書き送ったということになる。

本資料はその系統からの写本で、筆跡からみて近世初期の書写と考えられる。

### 【六〇】花鳥余情 写年不明 三〇冊

林鶯峰旧蔵「請求番号二〇三・〇〇〇二」

本資料は前掲資料同様、一条兼良の手による『花鳥余情』の写本。三〇卷三〇冊。袋綴。林家旧蔵。

「弘文学士院」の印から林鶯峰の旧蔵であったことが想定される。そのうち昌平坂学問所に収蔵された。表紙右肩・本文末尾に「昌平坂学問所」の墨印が捺されている。

本資料は浅葱色の表紙（二七・五糎×一九・八糎）に、砥粉色地に金泥で秋草文様が描かれた題簽（二〇・二糎×四・〇糎）が貼付されている。（⑮⑲⑳㉑㉒題簽欠、㉓無地料紙題簽）外題は「花鳥余情第一（第三十）」とあり、小字でそれぞれ巻名が墨書されている。

①「桐壺」、②「帚木」、③「空蟬／夕顔」、④「若紫／末摘花」、⑤「紅葉賀／花のえん」、⑥「あふひ」、⑦「さかき／花散里」、⑧「須磨／明石」、⑨「濤標／蓬生／関屋」、⑩「絵合／松風」、⑪「薄雲／あさかほ／をとめ」、⑫「玉かつら」、⑬「初音／胡蝶」、⑭「ほたる」、⑮「とこなつ／かゝりひ／のわき／みゆき」（鉛筆による補筆）、⑯「ふちはかま／まきはしら」、⑰「うめがえ」（鉛筆による補筆）、⑱「藤裏葉」、⑲「わかかな上」（鉛筆による補筆）、⑳「若菜下」、㉑「柏木／横笛／すゝむし」、㉒「ゆふきり／御法」、㉓欠、㉔「匂宮／紅梅／竹川」、㉕「はしひめ／しひかもと」（鉛筆による補筆）、㉖「総角」、㉗「さわらひ」、㉘「あつまや」、㉙「うき舟／かけろふ」、㉚「手習／夢浮橋」

外題については、題簽が欠けていたり、墨が流れているなどで判読不明の箇所が見られ、第二三冊目のほかは鉛筆で補筆されている。第二七冊目・第二八冊目は無地料紙の題簽で後補と想像される。

### 【書誌】

外題・「花鳥余情第一（第三十）」砥粉色地雲母引金泥秋草文様題簽（二〇・二×四・〇糎）に墨書

内題・「花鳥余情」

表紙・浅葱色表紙(二七・五糎×一九・八糎)

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉九行

字高・二二・〇糎

墨付丁数・①三七丁、②四八丁、③三五丁、④四八丁、⑤三九丁、⑥三一丁、⑦二九丁、⑧五一丁、⑨二八丁、⑩三七丁、⑪四九丁、⑫三五丁、⑬四六丁、⑭三四丁、⑮五〇丁、⑯二六丁、⑰二四丁、⑱二二丁、⑲四九丁、⑳二五丁、㉑二五丁、㉒二四丁、㉓二七丁、㉔三六丁、㉕三〇丁、㉖二九丁、㉗四三丁、㉘一七丁、㉙四五丁、㉚二九丁

印記・各冊一才「林氏藏書」「大学藏書」「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」「弘文学士院」

各冊末尾「昌平坂学問所」「内閣文庫」

各冊表紙「昌平坂学問所」

### 【写年・書写者】

本資料の写年・書写者については不明。

第三〇冊目の奥書には、文明四年の年記のある一条兼良の奥書のほか、「明応七年五月二日記之 儀同三司」の識語がある。

【六一】花鳥余情 写年不明 一四冊

内務省旧蔵「請求番号二〇三・〇〇〇六」

本資料は前掲の資料同様、一条兼良の『花鳥余情』の写本。三〇卷一五冊だが一冊(卷二三・二四)欠けているため一四冊が所蔵されている。袋綴。内務省旧蔵。

表紙は縦刷毛目の布目紙に、紺色の秋草丸文を刷ったもの。題簽は砥粉色の無地料紙で、外題が墨書されている。料紙は薄様の楮紙。

「明治十三年購求」の印が捺されていることから、同年に政府が購入したものと推定される。

### 【書誌】

外題・「花鳥余情 自卷一至卷二(自卷廿九卷三十止)」無地料紙題簽

(一九・三糎×四・〇糎)に墨書

内題・「花鳥余情」

表紙・縦刷毛目秋草丸文表紙(二七・〇糎×一九・〇糎)

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一二行

字高・二三・〇糎

墨付丁数・①四九丁、②三六丁、③三五丁、④五四丁、⑤三二丁、⑥四四丁、⑦四一丁、⑧三三丁、⑨三三丁、⑩三九丁、⑪二五丁、⑫二九丁、⑬三七丁、⑭三九丁

印記・各冊一才「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「明治十三年購求」

各冊末尾「日本政府図書」「大日本帝国図書印」「内閣文庫」

【写年・書写者】

体裁、筆跡などからみて、本資料の写年は江戸時代後期と推定される。奥書は一条兼良の文明四年のもののみ。

【六二】花鳥余情 写年不明 一冊

内務省旧蔵「請求番号二〇三・〇〇〇五」

本資料は前掲資料同様、一条兼良による『花鳥余情』の写本だが、巻二一・二二を収めた一冊しか伝存していない。袋綴。

表紙は縦刷毛目の布目紙に、紺色の秋草丸文を刷ったもので、前掲資料（二〇三・〇〇〇六）と同じもの。題簽も砥粉色の無地料紙で、外題の筆跡も同じものである。

本文の筆跡も同筆。但し、前掲資料のうち欠けているのは巻二二・二三の部分で、本資料と同じ巻二一・二二は現存しており、ツレとは言い難い。

本資料の一才には「明治十二年購求」の印が捺されていることから、前掲資料に比べて本資料のほうが先に政府によって購入されたことがわかる。

【書誌】

外題・「花鳥余情 自卷廿一至卷廿二」無地料紙題簽（一九・三糎×四・

〇糎）に墨書

内題・「花鳥余情」

表紙・縦刷毛目秋草丸文表紙（二七・〇糎×一九・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一二行

字高・二三・〇糎

墨付丁数・二五丁

印記・各冊一才「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「明治

十二年購求」

二五ウ「日本政府図書」「大日本帝国図書印」「内閣文庫」

【写年・書写者】

前掲資料と同筆、書写年代もほぼ同じ時期と想像される。

【六三】弄花〔抄〕 写年不明 一〇冊

紅葉山文庫旧蔵「請求番号特〇一〇・〇〇〇五」

本資料は三条西実隆による『源氏物語』の注釈書『弄花抄』の写本。牡丹花肖柏の『源氏物語聞書』を基本資料とし、また肖柏の説に多く拠っていることから、目録では作者名を「牡丹花肖柏・三条西実隆」としている。袋綴。一〇冊。

肖柏は一条兼良と宗祇の講釈を『源氏物語聞書』にまとめ、実隆はこれを借り受けて『源氏物語』の注釈書の作成に着手した。永正元年頃に完成したものが第一次本、永正七年頃に増補・改訂したものが第二次本と称さ

れ、一般に流布したのは第二次本系統である。

文明九年に宗祇が兼良に質問して得た回答をまとめた「一答」、文明一二年に肖柏が兼良に受けた教えをまとめた「一勘」など、自説や先行する説のほかにも多くの説を挙げる。肖柏からは資料を借り受けるだけでなく、多くの助言を受けたと考えられ、題号『弄花抄』は肖柏の号「弄花軒」に基づく。

本書に特徴的な点は、各巻の「講談日数」として、その巻の講釈に必要な日数を記している点で、当時の講釈の様子を知る手がかりとなっている。ほかにも「作者」「作意」「時代」などの項目に分類されており、これらは後世の注釈書にも継承される形式となった。

実隆は本書を完成させた後、『細流抄』に着手し、三条西家源氏学を確立させることになる。

本資料は紅葉山文庫の旧蔵書で、「内閣文庫本」として知られる写本。寛永二年の本奥書がある。

砥粉色の雲母引の表紙には、雲母刷で秋草文様が印刷されている。見返しは銀切箔。題簽も雲紙料紙で、外題の字も極めて美麗。表紙には各冊の巻名が打付書されている。外題と同筆か。

それぞれ表紙に書かれている巻名は次の通り。

- ① 「桐つほ／はゝき木／うつせみ／夕かほ／若むらさき／すゑつむ花／もみちの賀」
- ② 「花のえん／あふひ／さかき／花ちる里」
- ③ 「須磨／あかし／みをつくし／よもきふ／せき屋／ゑあはせ」
- ④ 「松かせ／うす雲／朝かほ／乙女／玉かつら／はつね／こてふ／ほたる／とこなつ」
- ⑤ 「かゝり火／野わき／御幸／ふちはかま／まきはしら／梅かえ／藤の

うら葉／わかenas」

- ⑥ 「わかな下／かしは木／よこ笛／すゝむし」
  - ⑦ 「夕霧／みのり／まほろし／にほふ宮／こうはい」
  - ⑧ 「竹川／はし姫／椎かもと／あけまき／さわらび」
  - ⑨ 「やとり木／あつまや／うき船」
  - ⑩ 「かけろふ／手ならひ／夢のうきはし」
- 第一冊目の遊紙にのみ「日本政府図書」の蔵書票が貼付されている。

#### 【書誌】

外題・「弄花 一（十終）」左肩雲紙料紙題簽（一七・〇糎×三・三糎）に墨書

内題・なし

表紙・砥粉色秋草文様雲母刷表紙（二七・三糎×一九・三糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一〇行

字高・二一・〇糎

墨付丁数・①九八丁、②六九丁、③八七丁、④一〇八丁、⑤一二〇丁、

⑥一〇四丁、⑦九二丁、⑧一〇八丁、⑨一〇二丁、⑩六二丁

印記・各冊一才「日本政府図書」「内閣文庫」

各冊末尾「日本政府図書」「内閣文庫」

#### 【写年・書写者】

本資料の写年・書写者とはつきりしない。先に述べたように、本奥書には寛永二年の年記が見えるため、少なくともそれ以降の書写である。

【六四】一葉抄 写年不明 一〇冊

紅葉山文庫旧蔵「請求番号特一〇一〇〇〇六」

本資料は藤原正存による『源氏物語』の注釈書『一葉抄』の写本で、袋綴、一〇冊。

『一葉抄』には著者として藤原正存の名が見えるが、これは『新撰菟玖波集作者部類』にその名が記載されている細川家の家人、池田新右衛門のことと考えられている。

『雨夜談抄』や『弄花抄』の影響を強く受けており、宗祇や肖柏などの講釈を基に連歌師の世界で成立した注釈書であるといえる。特筆すべき点は『源氏物語』の本文を「作者の詞」（作者の語り）「人々の心詞」（登場人物の心内語と会話文）「双紙の詞」（語り手の解釈や感想など）「草紙の地」（そのほかの地の文）に分けて分析した点で、特に「双紙の詞」は「草子地」として『細流抄』以降引き継がれて研究の対象となっている。

本資料は後補の代赭色表紙に、無地の題簽で外題が出されている。各冊扉に巻名が記されている。

- ①「桐壺／帚木」、②「空蟬／夕顔／若紫／末摘花」、③「紅葉賀／花宴／葵／賢木／花散里」、④「須磨／明石／濤標／蓬生／関屋／絵合／松風」、⑤「薄雲／槿／乙女／玉鬘／初音／胡蝶／蛩」、⑥「常夏／篝火／野分／行幸／蘭／楨柱／梅枝／藤裏葉」、⑦「若菜／同下／柏木」、⑧「横笛／鈴虫／夕霧／御法／幻／勾宮／紅梅／竹川」、⑨「橋姫／椎本／総角／早蕨／寄生」、⑩「東屋／浮舟／蜻蛉／手習／夢浮橋」

【書誌】

外題・「一葉抄 一（十終）」左肩無地料紙題簽（一七・五糎×三・六

糎）

内題・「一葉抄」

表紙・代赭色表紙（二七・二糎×一九・三糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉九行

字高・二一・〇糎

墨付丁数・①一〇八丁、②一〇五丁、③一六七丁、④一三三丁、⑤一三

七丁、⑥一一四丁、⑦一三三丁、⑧一六〇丁、⑨一三三丁、⑩一三四丁

印記・①一才「太政官文庫」「日本政府図書」「内閣文庫」

①扉ウ「日本政府図書」蔵書票貼付

②⑩扉才「太政官文庫」

②⑩一才「日本政府図書」「内閣文庫」

①⑩本文末尾「日本政府図書」「太政官文庫」

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者ともに不明。

【六五】「一葉抄」 写年不明 九冊

紅葉山文庫旧蔵「請求番号二〇三二〇〇一八」

本資料は前掲資料同様、藤原正存による『源氏物語』の注釈書『一葉抄』の写本だが、「玉鬘」から「御幸」までに相当する一冊が欠けており全九冊。

袋綴。

外題は無地の題簽（一七・七糎×三・三糎）に「河海抄」と墨書されているが、本文・奥書ともに『一葉抄』である。第一冊目の表紙には、附箋（一五・八糎×五・五糎）が貼付されており、そこには朱書で「此書は河海抄にあらず書中の文を按／する事牡丹花肖柏か一葉抄十五卷十本／と云るものゝ如し明応乙卯の年に作れる／よし群書一覽に見えたり」とある。各冊一丁目のオモテにそれぞれの巻名が記載されている。

- ① 「きりつほ／はゝき木／うつせみ／ゆふかほ／わかむらさき」
  - ② 「すゑつむ花／もみちの賀／花のえん／あふひ／さか木」
  - ③ 「花ちる里／須磨／あかし／みをつくし／蓬生／関屋／絵合」
  - ④ 「松風／うす雲／朝かほ／乙女」
  - ⑤ 「ふちはかま／まきはしら／むめかえ／ふちのうら葉／わかな上」
  - ⑥ 「わかな下／かしは木／よこふえ／すゝむし」
  - ⑦ 「夕きり／みのり／まほろし／にほふみや／こうはい／たけかは」
  - ⑧ 「はし姫／しみかもと／あけまき／さわらひ／やとりき」
  - ⑨ 「あつまや／うきふね／かけろふ／手ならひ／夢のうきはし」
- 外題と本文の筆跡は別筆に見える。また第五冊目、第六冊目、第七冊目の本文はそれぞれ別筆で、少なくとも四人以上の書写。

【書誌】

外題・「河海抄 一（〜十）」左肩無地料紙題簽（一七・七糎×三・三糎）

（※「河海抄 五」のみ欠）

内題・なし

表紙・代赭色表紙（二七・〇糎×一九・三糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一〇行

字高・二〇・五糎

墨付丁数・①七七丁、②八八丁、③八七丁、④六六丁、⑤九七丁、⑥六

九丁、⑦八九丁、⑧九八丁、⑨八八丁

印記・各冊一才「秘閣圖書之章」「太政官文庫」、本文末尾「太政官文庫」

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者ともに不明。

【六六】源氏物語聞書 写年不明 一五冊

紅葉山文庫旧蔵「請求番号特〇一一・〇〇〇三」

本資料は里村昌休による『源氏物語』の注釈書『休閒抄』の写本。袋綴。一五冊。紅葉山文庫旧蔵。

本書は一般的には『休閒抄』の題で知られているものだが、里村昌休の聞書を中心とするため『源氏物語聞書』の書名を持つ。昌休は宗牧に学んだ連歌師で、『休閒抄』にも宗牧の説が多く反映されている。天文一九年成立。河海抄・花鳥余情・弄花抄を補う形で編まれ、特に連歌師の歌作のための注釈としての性格を色濃く持つ。

本資料は『休閒抄』のなかでも「内閣文庫本」として知られる写本で、成立当初の形態を残す陽明文庫本系統に対し、整理された内容を持つと指摘されている。天文一九年の年記を持つ昌休の跋文のあと、八五才からは



『紫明抄』『河海抄』『花鳥余情』『三源一覽』の序文がそれぞれ抜書きされている。

扉には中央に附箋(一四・八糎×二・八糎)が貼付されており、題と各巻名が記されている。本文とは別筆に見えることから後補か。

①「一 休聞 桐壺／箒木」、②「二 休聞 空蟬 夕顔／若紫」、③「三 休聞 末摘花 紅葉賀／花宴 葵」、④「四 休聞 榊 花散里 須磨／明石 濤標」、⑤「五 休聞 蓬生 閑屋 絵合／松風 薄雲 槿」、⑥「六 休聞 乙女 玉鬘／初音」、⑦「七 休聞 胡蝶 蛭 常夏／篝火 野分」、⑧「八 休聞 行幸 蘭／榎柱 梅枝」、⑨「九 休聞 藤裏葉／若菜上」、⑩「十 休聞 若菜下 柏木／横笛」、⑪「十一 休聞 すゝむし 夕霧／御法 まほろし」、⑫「十二 休聞 雲隠 匂宮／紅梅 竹川」、⑬「十三 休聞 橋姫 椎本／総角 早蕨」、⑭「十四 休聞 寄生／東屋」、⑮「十五 休聞 浮舟 蜻蛉／手習 夢浮橋」

印記はなく、第一冊目の扉のウラに「日本政府図書」蔵書票が貼付されているのみ。

### 【書誌】

外題・「休聞 一(〜十五)」左肩無地料紙題簽(一四・二糎×三・六糎)  
内題・「源氏物語聞書」  
表紙・代赭色表紙(二五・五糎×一九・五糎)  
料紙・楮紙  
匡郭・無辺無界  
行数・每半葉一〇行  
字高・二一・五糎  
墨付丁数・①八六丁、②七三丁、③八五丁、④一一八丁、⑤九〇丁、⑥

九一丁、⑦七四丁、⑧八二丁、⑨九〇丁、⑩八七丁、⑪七九丁、⑫六二丁、⑬八五丁、⑭六九丁、⑮八六丁

印記・扉ウ「日本政府図書」蔵書票

### 【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。筆跡からみて江戸時代初期か。

### 【六七】花屋抄 写年不明 四冊

和学講談所旧蔵「請求番号特〇六二〇〇一四」

本資料は花屋玉栄による『源氏物語』の注釈書『花屋抄』の写本。「源氏花屋抄」などの書名でも知られる。袋綴。四冊。

『花屋抄』は『源氏物語』中の主な語句について、初学者向けに平易・簡潔に解説したもので、文禄三年に成立した。それまでの三条西家流をはじめとする注釈書が、諸註の集成を目指したことに対し、『花屋抄』はその煩雑さ・難解さに批判を加え、平易さ・簡潔さに重点を置いている。

著者の玉栄は近衛植家の息女で、蓬左文庫本の跋文年記によれば文禄三年の時点で六九歳。玉栄の詳細な経歴ははっきりしないものの、豊臣秀吉自筆「源氏物語のおこり」(専修大学図書館蔵)には玉栄の奥書が見えることから、父植家や弟前久と共に豊臣家と親交があったことがうかがえる。

『花屋抄』は伝本があまり多くなく、本資料は特に「内閣文庫本」として知られるものである。

①四九ウには「字ノ誤かな遺落字等まで本のことく／写をく也」、④三一

ウには「右花屋抄四冊稀之注本秘所と在之を致所望申請ノ急ニ書写置也字ノ誤かなつかひ落字等如本書とめノ置也 省林」と墨書されている。

【書誌】

外題・「花屋抄 一（〜四）」中央無地料紙題簽（二五・八糎×三・三糎）

に墨書（※②のみ四周双辺刷題簽に墨書、③は無地料紙題簽と四周双辺刷題簽の両方が並べて貼付されている）

内題・なし

表紙・朽葉色表紙（二六・〇糎×二〇・八糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一二行

字高・二一・〇糎

墨付丁数・①四九丁、②四九丁、③四一丁、④三二丁

印記・各冊一才「書籍館印」「浅草文庫」「日本政府図書」「和学講談所」

「内閣文庫」

各冊末尾「内閣文庫」

【写年・書写者】

写年・書写者とも不明。

【六八】細流抄 写年不明 一〇冊

紅葉山文庫旧蔵「請求番号特〇九〇〇〇一一」

本資料は三条西実隆による『源氏物語』の注釈書『細流抄』の写本。綴葉装。一〇冊。

『細流抄』は三条西公条が、父実隆の講釈をノートした『源氏物語聞書』を基に整理したものと考えられてきたため、当館目録にも著者の名前として三条西公条が記載されているが、近年の研究ではこれは否定されている。実隆が『弄花抄』を編んだのち、再び着手した『源氏物語』注釈が、現在の『細流抄』と考えられている。能登守護畠山義総の求めに応じて送付した『源氏物語聞書』と並行するように、編集・増補をしたものが『細流抄』であり、そこからさらに発展したものが『明星抄』である。

特色としては、一条兼良・宗祇・牡丹花肖柏らの手法を発展させ、三条西家流の源氏学を確立した点にある。

本資料は『細流抄』の中でも「内閣文庫本」として知られる資料。『源氏物語古注集成七』（桜楓社）に紹介されている。

表紙は紺地に金糸で唐草文様が織られた絹布表紙で、題簽も金泥で霞が描かれている豪華なもの。料紙も厚手の布目紙が用いられている。状態も極めて良い。

金茶色地に唐草文様が織られた絹布の帙（二四・二糎×一八・〇糎×一四・〇糎）に入れられている上に、黒漆塗の箱（二八・三糎×二二・〇糎×一九・三糎）に入れられている。箱の蓋には金蒔絵で「細流抄」とある。本文筆跡も美麗。外題は同筆か。

【書誌】

外題・「細流抄 卷第一（～卷第十）」金泥霞文様料紙題簽（一四・〇糎×三・〇糎）に墨書

内題・「細流抄」

見返し・金泥霞文様

表紙・紺地金糸唐草文様（織）表紙（二四・〇糎×三・〇糎）

料紙・斐紙（布目紙）

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一〇行

字高・一九・〇糎

墨付丁数・①一二九丁、②一一八丁、③九四丁、④一二五丁、⑤一一

丁、⑥一〇七丁、⑦一一七丁、⑧一二五丁、⑨一四五丁、⑩一二〇丁

印記・①遊紙「日本政府図書」（蔵書票）

①一才「日本政府図書」「内閣文庫」

②～⑩一才「秘閣図書之章」

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。筆跡、装丁などから見て江戸時代前期の書写か。

【六九】〔源氏物語聞書〕 写年不明 一冊

紅葉山文庫旧蔵「請求番号二〇三・〇〇一四」

本資料は前掲資料と同じ『細流抄』の写本だが、首巻・桐壺巻・帯木巻を収める一冊のみが現存する。袋綴。一冊。

印記がひとつも捺されておらず、紅葉山文庫の旧蔵と考えられるが、虫損・水損などがあり状態はあまりよくない。

【書誌】

外題・「源氏物語聞書」左肩打付朱書

内題・なし

見返し・「日本政府図書」蔵書票貼付

表紙・朽葉色表紙（二七・〇糎×二〇・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一〇行

字高・二二・五糎

墨付丁数・八〇丁

印記・なし

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。

## 【七〇】源氏物語抄 写年不明 五四冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三二〇〇一六」

本資料は林宗二による『源氏物語』の注釈書で、一般的な書名としては『林逸抄』として知られる。本資料の場合、外題は「源語林逸抄」、内題は「源氏物語抄」となっており、目録題はこの内題に基づくものである。なお、永祿三年の奥書を持つ自筆本が天理図書館に伝来している。

林宗二は「饅頭屋宗二」として知られるように饅頭屋を家業とした商人だったが、牡丹花肖柏に連歌を学び、また五山の僧とも交わるなど、学問を深めた人物である。いわゆる『饅頭屋本節用集』の著者ともされる。

『林逸抄』には各巻の末尾にそれぞれ識語があり、その記述から天文一九年から永祿二年まで十年以上の歳月をかけて記されたことがわかってい

る。本資料は和学講談所の旧蔵。全五四冊だが、每半葉の行数や字高はまちまちで、筆跡も異なる。少なくとも複数人の手による合写本。

各冊第一丁目に「浅草文庫」「和学講談所」「書籍館印」「日本政府図書」の四種の蔵書印が捺されているが、第一五冊目のみ「浅草文庫」印を欠く。

## 【書誌】

外題・①「林逸抄 桐壺一」左肩打付墨書、②「林逸抄 箒木二」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、③「林逸抄 空蟬三」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、④「林逸抄 夕顔四」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、⑤「林逸抄 若紫五」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、⑥「林逸抄 末摘花六」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、⑦「林逸抄 紅葉賀七」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）

〇糎）、⑧「林逸抄 花宴八」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、⑨「林逸抄 葵九」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、⑩「林逸抄 賢木十」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、⑪「林逸抄 散里十一」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、⑫「林逸抄 須磨十二」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、⑬「林逸抄 明石十三」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、⑭「林逸抄 濤標十四」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、⑮「林逸抄 蓬生十五」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、⑯「林逸抄 関屋十六」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、⑰「林逸抄 絵合十七」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、⑱「林逸抄 松風十八」四周双边刷題簽（一八・二糎×三・二糎）に墨書、⑲「林逸抄 薄雲十九」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、⑳「林逸抄 檜廿」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、㉑「林逸抄 乙女廿一」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、㉒「林逸抄 玉鬘廿二」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、㉓「林逸抄 初音廿三」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、㉔「林逸抄 胡蝶廿四」四周双边刷題簽（一八・二糎×三・二糎）に墨書、㉕「林逸抄 ほたる廿五」四周双边刷題簽（一八・二糎×三・二糎）に墨書、㉖「林逸抄 常夏廿六」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、㉗「林逸抄 篝火 廿七」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、㉘「林逸抄 野分廿八」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、㉙「林逸抄 行幸廿九」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、㉚「林逸抄 藤袴卅」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、㉛「林逸抄 楨柱卅一」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、㉜「林逸抄 梅枝卅二」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、㉝「林逸抄 藤裏葉卅三」、㉞「林逸抄 若菜上」左肩無地料紙題簽（一六・五糎×四・〇糎）、㉟「林逸抄 若

菜下」左肩無地料紙題簽(一六・五糶×四・〇糶)、<sup>36</sup>「林逸抄 柏木廿六」左肩無地料紙題簽(一六・五糶×四・〇糶)、<sup>37</sup>「林逸抄 横笛廿七」左肩無地料紙題簽(一六・五糶×四・〇糶)、<sup>38</sup>「林逸抄 鈴虫廿八」左肩無地料紙題簽(一六・五糶×四・〇糶)、<sup>39</sup>「林逸抄 夕霧卅九」左肩無地料紙題簽(一六・五糶×四・〇糶)、<sup>40</sup>「林逸抄 御法四十」左肩無地料紙題簽(一六・五糶×四・〇糶)、<sup>41</sup>「林逸抄 幻四十一」左肩無地料紙題簽(一六・五糶×四・〇糶)、<sup>42</sup>「林逸抄 雲かくれ四十二」四周双边刷題簽(一六・五糶×三・二糶)に墨書、<sup>43</sup>「林逸抄 紅梅四十三」左肩無地料紙題簽(一六・五糶×四・〇糶)、<sup>44</sup>「林逸抄 竹川四十四」四周双边刷題簽(一六・五糶×三・二糶)に墨書、<sup>45</sup>「林逸抄 橋姫四十五」左肩無地料紙題簽(一六・五糶×四・〇糶)、<sup>46</sup>「林逸抄 椎本四十六」左肩無地料紙題簽(一六・五糶×四・〇糶)、<sup>47</sup>「林逸抄 角総四十七」左肩無地料紙題簽(一六・五糶×四・〇糶)、<sup>48</sup>「林逸抄 早蕨四十八」左肩無地料紙題簽(一六・五糶×四・〇糶)、<sup>49</sup>「宿木 四十九」左肩打付墨書、<sup>50</sup>「林逸抄 東屋五十」左肩無地料紙題簽(一六・五糶×四・〇糶)、<sup>51</sup>「林逸抄 浮舟五十一」左肩無地料紙題簽(一六・五糶×四・〇糶)、<sup>52</sup>「林逸抄 蜻蛉五十二」左肩無地料紙題簽(一六・五糶×四・〇糶)、<sup>53</sup>「林逸抄 手習五十三」左肩無地料紙題簽(一六・五糶×四・〇糶)、<sup>54</sup>「林逸抄 夢浮橋五十四終」左肩無地料紙題簽(一六・五糶×四・〇糶)、

内題・「源氏物語抄」

表紙・浅葱色布目型押表紙(二九・〇糶×二二・〇糶)(※第五四冊目裏表紙のみ代赭色横刷毛目表紙)

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・①②每半葉一二行、③每半葉一〇行、④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲每半葉一二行、⑳每

半葉一〇行、<sup>21</sup>每半葉一行、<sup>22</sup>每半葉二二行、<sup>23</sup><sup>24</sup>每半葉一行、<sup>25</sup><sup>26</sup>每半葉一〇行、<sup>27</sup>⑳每半葉一行、<sup>30</sup>⑳每半葉一〇行、<sup>34</sup><sup>35</sup>每半葉一行、<sup>36</sup>每半葉一〇行、<sup>37</sup>⑳每半葉二二行

字高・二三・五糶〵二四・五糶

墨付丁数・①三七丁、②五九丁、③二一丁、④四四丁、⑤三六丁、⑥三一丁、⑦三〇丁、⑧一九丁、⑨三九丁、⑩四〇丁、⑪五丁、⑫三八丁、⑬三二丁、⑭二八丁、⑮一九丁、⑯六丁、⑰二二丁、⑱二五丁、⑲二七丁、<sup>20</sup>二五丁、<sup>21</sup>五二丁、<sup>22</sup>四五丁、<sup>23</sup>二五丁、<sup>24</sup>二五丁、<sup>25</sup>四〇丁、<sup>26</sup>二二丁、<sup>27</sup>六丁、<sup>28</sup>三三丁、<sup>29</sup>三四丁、<sup>30</sup>二二丁、<sup>31</sup>五〇丁、<sup>32</sup>三〇丁、<sup>33</sup>三三丁、<sup>34</sup>八八丁、<sup>35</sup>六八丁、<sup>36</sup>三七丁、<sup>37</sup>三三丁、<sup>38</sup>一五丁、<sup>39</sup>六四丁、<sup>40</sup>一八丁、<sup>41</sup>二四丁<sup>42</sup>一九丁、<sup>43</sup>一九丁、<sup>44</sup>五五丁、<sup>45</sup>三四丁、<sup>46</sup>三七丁、<sup>47</sup>九一丁、<sup>48</sup>一九丁、<sup>49</sup>六七丁、<sup>50</sup>三八丁、<sup>51</sup>七六丁、<sup>52</sup>七二丁、<sup>53</sup>六五丁、<sup>54</sup>一六丁

印記・「浅草文庫」「和学講談所」「書籍館印」「日本政府図書」(各冊一才)(※第一五冊目のみ「浅草文庫」印を欠く)

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。

【七一】源氏物語抄 写年不明 二五冊

旧蔵者不明「請求番号特〇五八・〇〇〇二」

本資料は前掲資料同様、林宗二による『林逸抄』の写本。目録題は第一

冊目の内題を採る。外題は「源語林逸抄」となっている。袋綴。二五冊。第二冊目のみ筆跡が異なっており、後補と考えられる。

また扉に巻名が墨書されているが、これも筆跡から見て後補と考えられる。それぞれ以下の通り。

- ①「きりつほ」、②「箒木」、③「うつせみ／夕かほ」、④「わかむらさき／末つむ花」、⑤「紅葉賀／花宴／葵」、⑥「さか木／花散里／須磨」、⑦「あかし／みをつくし／蓬生／せきや」、⑧「まつ風／薄雲／あさかほ」、⑨「乙女／玉かつら」、⑩「初音／胡蝶／ほたる」、⑪「とこなつ／篝火／野分／行幸／蘭」、⑫「真木はしら／梅かえ／藤のうらはは」、⑬「若菜上」、⑭「若菜下」、⑮「かしは木／よこ笛／鈴むし」、⑯「夕きり」、⑰「みのり／まほろし」、⑱「雲かくれ／にほふ宮／紅梅／竹川」、⑲「はしひめ／しあかもと」、⑳「あけまき」、㉑「さわらひ／やとり木」、㉒「東屋」、㉓「うきふね」、㉔「かけろふ」、㉕「手ならひ／夢のうき橋」
- 全冊とも同じ元表紙だが、第二冊目と第三冊目の裏表紙のみ比較的新しい。

本資料には印記が全く捺されていない。来歴不明。各冊に虫除けのイチヨウの葉が入れている。

#### 【書誌】

外題・「源語林逸抄 一（く廿五）」中央無地料紙刷題簽（一八・五糎×四・〇糎）

内題・「源氏物語抄」

表紙・黄檗色布目型押唐草文様（刷）表紙（二六・五糎×一九・七糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一一行

字高・二一・五糎×二三・五糎

墨付丁数・①五四丁、②一〇六丁、③六五丁、④八〇丁、⑤八六丁、⑥九七丁、⑦一四五丁、⑧九三丁、⑨一一五丁、⑩一〇七丁、⑪一二〇丁、⑫一二〇丁、⑬九六丁、⑭七六丁、⑮八三丁、⑯七一丁、⑰四四丁、⑱一〇三丁、⑲七三丁、⑳八三丁、㉑九五丁、㉒三九丁、㉓八六丁、㉔八四丁、㉕九五丁

印記・なし

#### 【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。

【七二】萬水一露 寛文三年刊 六二冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号特〇一二・〇〇〇二」

本資料は永閑による『源氏物語』の注釈書で、寛文三年に出版されたものの袋綴。全六二冊。

『萬水一路』の初稿本（国立国会図書館蔵）によれば天正三年～天正一四年頃の成立と考えられる。これまでの注釈書を網羅し、集大成的な性格を持つが、あえて省略・要約の方法を採らなかったため、冗長・煩雑とも評価される。これまで注釈書は語句毎に注を挿れる方式が一般的だったが、本書は段落毎に注を挿れているのが特徴。また散逸した『宗碩抄』を引用している点も貴重。

永閑は宗碩の弟子に当たると連歌師で、京の連歌壇で活躍した。能登の人。  
『萬水一路』は国立国会図書館本をはじめ多くの写本が伝わる。承応元年頃に松永貞徳の跋文を加えて出版され、本資料はその寛文三年版。

本資料には蔵書印が捺されておらず、紅葉山文庫の旧蔵と推測される。状態は極めて良いものの、第二冊目・第四一冊目・第六二冊目の題簽のみ後補。無地の料紙に、元題簽に似せた字で「萬水一露」の墨書。大きさも元題簽と同じ。

【書誌】

外題・「萬水一露 きりつほ 一（雲かくれ 六十二）」中央無地料紙  
刷題簽（二〇・〇糎×三・八糎）

内題・「源氏物語聞書」

見返し・①「日本政府図書」蔵書票貼付

表紙・紺色表紙（二七・五糎×一九・七糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一三行

字高・二一・五糎

墨付丁数・①七五丁、②六〇丁、③七〇丁、④二三丁、⑤八九丁、⑥八五丁、⑦六五丁、⑧五七丁、⑨三五丁、⑩九四丁、⑪一〇一丁、⑫九丁、⑬八〇丁、⑭八三丁、⑮六五丁、⑯四三丁、⑰二二丁、⑱四四丁、⑲一二丁、⑳五四丁、㉑四六丁、㉒一〇四丁、㉓八五丁、㉔三七丁、㉕四五丁、㉖五五丁、㉗五二丁、㉘八丁、㉙三五丁、㉚六〇丁、㉛二九丁、㉜七八丁、㉝五〇丁、㉞六〇丁、㉟一〇六丁、㊱九〇丁、㊲一〇〇丁、㊳九四丁、㊴七〇丁、㊵三四丁、㊶二四丁、㊷六七丁、㊸五二丁、㊹三〇丁、㊺四七丁、

⑳二七丁、㉑二六丁、⑳七七丁、㉒六八丁、㉓六九丁、㉔一三〇丁、㉕三五丁、㉖六五丁、㉗八四丁、㉘八〇丁、㉙八六丁、㉚五二丁、㉛六四丁、㉜六六丁、㉝六一丁、㉞四〇丁、㉟五丁  
印記・なし

【刊年・刊行者】

第六一冊目「夢浮橋」の三九丁オモテに刊記あり。

「寛文三稔癸卯霜月吉旦／開板之／二條通玉屋町村上平樂寺」

四周双辺の郭（一四・八糎×五・〇糎）内。

前掲の『大和物語』と同じ村上勘兵衛。本姓を井上氏。高野山御用、法華宗御用。明治には官板御用。現在の平樂寺書店（中京区東洞院三条上ル）で、東洞院通に移ったのは文化頃。本資料出版の前年に武村市兵衛・山本平左衛門・八尾甚四郎とともに『日蓮聖人遺文』を出版している。

【七三】萬水一露 寛文三年刊 六二冊

内務省旧蔵「請求番号二〇三・〇〇二九」

本資料は前掲『萬水一露』の同版本。袋綴。全六二冊。明治十四年に政府が購入した。旧蔵者不明。

前掲資料では第六二冊目に「雲隠」が配されているが、本資料の場合は第四六冊目となっている。

前掲資料のほうが保存状態は良いが、本資料は紺色亀甲繫唐花艶出表紙に、雲紙の題簽（雲の色は青・紫・朱の三種）を用いるなど、趣向が凝ら

された装丁である。

本資料には各冊の一丁目「支子園図書記」の陽刻印、また第一冊目一丁目に「桂齋文庫」の陽刻印が捺されている。ほかに「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十四年購求」の印記。

【書誌】

外題・「萬水一露 きりつほ（夢の浮はし）」中央雲紙料紙題簽（一八・

〇糶×四・八糶）に墨書

内題・「源氏物語聞書」

表紙・紺色亀甲繫唐花艶出表紙（二七・二糶×一九・二糶）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一三行

字高・二一・五糶

墨付丁数・①七五丁、②六〇丁、③七〇丁、④二三丁、⑤八九丁、⑥八五丁、⑦六五丁、⑧五七丁、⑨三五丁、⑩九四丁、⑪一〇一丁、⑫九丁、⑬八〇丁、⑭八三丁、⑮六五丁、⑯四三丁、⑰一二丁、⑱四四丁、⑲一二丁、⑳五四丁、㉑四六丁、㉒一〇四丁、㉓八五丁、㉔三七丁、㉕四五丁、㉖五五丁、㉗五二丁、㉘八丁、㉙三五丁、㉚六〇丁、㉛二九丁、㉜七八丁、㉝五〇丁、㉞六〇丁、㉟一〇六丁、㊱九〇丁、㊲一〇〇丁、㊳九四丁、㊴七〇丁、㊵三四丁、㊶二四丁、㊷六七丁、㊸五二丁、㊹三〇丁、㊺四七丁、㊻二七丁、㊼二六丁、㊽七七丁、㊾六八丁、㊿六九丁、①一三〇丁、②三五丁、③六五丁、④八四丁、⑤八〇丁、⑥八六丁、⑦五二丁、⑧六四丁、⑨五六丁、⑩六一丁、⑪四〇丁、⑫五丁

印記・①一才「支子園図書記」「明治十四年購求」「大日本帝国図書」「日

本政府図書」「桂齋文庫」

【刊年・刊行者】

第六一冊目に承応元年の年記のある松永貞徳の跋文があるものの、刊記は欠く。但し、版面などから見て、寛文三年版と推測される。

【七四】（明星抄） 江戸初期写カ 二〇冊

和学講談所旧蔵「請求番号特〇六三・〇〇〇二」

本資料は『源氏物語』の注釈書『明星抄』の写本。江戸時代初期の書写か。袋綴。全二〇冊。

『明星抄』は三条西公条の手による注釈書で、『細流抄』の著者である父実隆の講釈を基に作成した『聞書』を整理したもの。公条は『聞書』を手元に置き、自ら講釈を催していたが、大永五年に能登守護である畠山義総からの依頼で『聞書』を送付することになり、実隆の校閲を受けた上で整理することになった。こののちも繰り返し手を入れ、天文八年から十年頃に作り直したものが『明星抄』である。

長年『明星抄』は、公条の子である実枝の手によるものと考えられてきたため、目録には著者名として三条西実枝の名前が記されているが、これは誤りである。

詳細な料簡が特徴で、以降の注釈書に大きな影響を与えた。

東北大学図書館、龍谷大学図書館に自筆稿本が所蔵されている。写本は多く伝来があるが、本資料は内閣文庫本として知られる写本。複数の筆跡が



見られ、合写本であることがわかる。虫損が目立つ。和学講談所旧蔵。代赭色の表紙は後世の改装と思われる。題簽には雲紙を用いている。雲の色は青。目録書名は外題を採ったもの。

【書誌】

外題・「明月抄 第一 桐壺（第二十 蜻蛉／手習／夢浮橋）」中央雲紙料紙題簽（二〇・〇糎×五・二糎）

内題・なし

表紙・代赭色表紙（二八・五糎×二一・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一〇行

字高・二二・二糎

墨付丁数・①四五丁、②六四丁、③五五丁、④五六丁、⑤三五丁、⑥七六丁、⑦九〇丁、⑧六四丁、⑨六四丁、⑩五二丁、⑪二七丁、⑫七六丁、⑬五三丁、⑭五七丁、⑮四七丁、⑯五九丁、⑰七三丁、⑱四七丁、⑲四七丁、⑳四九丁

印記・「書籍館印」「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」「和学講談所」

【写年・書写者】

本資料には元奥書のほかには写年・書写者を示すものがない。筆跡からみて江戸時代初期〜前期の写か。

【七五】明星抄 写年不明 一六冊

和学講談所旧蔵「請求番号二〇三・〇〇二三」

本資料は『源氏物語』の注釈書『明星抄』の写本。袋綴。全一六冊。

本資料の表紙と小口には「細流」と墨書されており、また、本文にも朱書で『細流抄』との比較校合がなされている点から見、長らく『細流抄』の異本と考えられていたようである。

第一冊目の見返しに、国文学者の山岸徳平氏による附箋が貼付されている。万年筆によるもので、以下の通り。

「細流 十六冊／此書は明星抄ナリ。誤ツテ細流ト題シテ他ノ／細流抄ト比較シテ聊校合セリ。サレド根底ハ／明星抄ナリ。故ニ発端ノ文アルナリ。／内容亦、明星抄タリ。／昭和二年竜集丁卯黄鐘上浣 山岸廼舎」

外題は「細流」で左肩に打付書、右肩には巻名が墨書されている。和学講談所の旧蔵。

【書誌】

外題・「細流 一（十六）」左肩打付墨書

内題・なし

表紙・代赭色表紙（二七・〇糎×一九・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・一〇行

字高・二三・〇糎

墨付丁数・①一〇二丁、②三八丁、③八五丁、④八四丁、⑤九七丁、⑥六二丁、⑦一〇九丁、⑧八一丁、⑨七二丁、⑩五七丁、⑪四五丁、⑫五四

丁、⑬八〇丁、⑭六三丁、⑮四七丁、⑯四七丁

印記・「書籍館印」「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」「和学講談所」

【写年・書写者】

本資料には元奥書のほかには写年・書写者を示すものがない。

【七六】明星抄 明暦三年刊 二〇冊

紅葉山文庫旧蔵「請求番号特〇一一・〇〇〇二」

本資料は『源氏物語』の注釈書『明星抄』の版本で、明暦三年に出版されたもの。紅葉山文庫旧蔵。

『明星抄』の版本は二〇冊で出版されており、本資料のほかには無刊記版の存在が知られる。

本資料は紅葉山文庫の旧蔵と推定される。

【書誌】

外題・「明星抄 首巻／きりつほ」「二」（くかけろふ／手ならひ／夢のうきはし 二十終） 左肩四周双边刷題簽（一八・〇糶×三・八糶）（※巻数は墨書で後補）

内題・なし

表紙・紺色表紙（二七・〇糶×一八・〇糶）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一一行

字高・一九・五糶

墨付丁数・①四一丁、②六三丁、③六六丁、④五七丁、⑤七五丁、⑥四七丁、⑦六五丁、⑧五五丁、⑨五四丁、⑩六四丁、⑪六六丁、⑫七一丁、⑬五一丁、⑭四七丁、⑮五九丁、⑯五九丁、⑰七八丁、⑱五六丁、⑲六〇丁、⑳八五丁

印記・①見返し「日本政府図書」蔵書票貼付

【刊年・刊行者】

第二〇冊目の八五才に刊記あり。

「書坊 洛湯今出川 林和泉掾 板行／松栢堂 時元（墨印）／明暦三

丁酉仲秋吉旦」

書肆は京の出雲寺和泉掾。本姓は林氏で、松栢堂は堂号。時元は初代の名。

【七七】「孟津抄」 写年不明 五一冊

和学講談所旧蔵「請求番号特〇六二・〇〇〇一」

本資料は『源氏物語』の注釈書『孟津抄』の写本。帯木・空蟬・夕顔の巻を欠いて全五一冊。綴葉装。和学講談所の旧蔵。

『孟津抄』は関白九条植通の手による注釈書で、植通の異名「九条禅閣」から別名『九禅抄』とも称される。『孟津抄』の書名は、黄河九曲が天に発し、その地名を「孟津」と呼ぶという故事に基づくもの。自らの学問はま

だ入り口に過ぎない、という意を込めて植通自身が命名したと考えられる。

九条植通は安土桃山時代の動乱期に閑白を務め、天文三年、二八歳のときに閑白を辞して以降は、長年地方を流転する生活を送った。前掲の『明星抄』の著者である三条西公条は植通の叔父に当たり、都に戻ってからはその源氏物語講釈を聴聞して三条西家の源氏学を受け継いだ。そのため、『孟津抄』は『河海抄』『花鳥余情』等を基礎に、様々な資料を加えた内容となっている。跋文によれば天正三年の成立。

本資料は、香色表紙に雲母で秋草文様を刷った美しい表紙を持つ。本文料紙は斐楮混ぜ漉き。左肩に無地の題簽が貼付してあるが、その下には打付書で卷数（一〇五十四）が墨書されている。ただし、本資料の場合、帚木・空蟬・夕顔を欠くので、二〇四は欠。第九冊目、第一一冊目は裏表紙が後補。第二四冊目は題簽が後補。

横刷毛目の帙（二二・〇糎×一六・〇糎×八・〇糎）に五つに分けられている。帙の左肩には四周双边刷題簽に「孟津 自一／至十三 一（〇）四十四／至五十四止 五」（一六・五糎×二・七糎）と出している。

#### 【書誌】

外題・「孟津 きりつほ（〇夢のうきはし）」左肩無地料紙題簽（二二・

三糎×二・五糎）に墨書

内題・なし

表紙・香色地秋草文様雲母刷表紙（二二・五糎×一五・八糎）

料紙・斐楮混ぜ漉き

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一〇行

字高・一八・五糎

墨付丁数・①七六丁、②七九丁、③六三丁、④四八丁、⑤三三丁、⑥八

五丁、⑦八四丁、⑧九丁、⑨九〇丁、⑩七八丁、⑪六三丁、⑫四一丁、⑬四六丁、⑭一〇丁、⑮五五丁、⑯五六丁、⑰五一丁、⑱一一二丁、⑲八六丁、⑳五六丁、㉑四六丁、㉒六一丁、㉓六二丁、㉔二〇丁、㉕四一丁、㉖七二丁、㉗三八丁、㉘七四丁、㉙五五丁、㉚六三丁、㉛一七五丁、㉜一三六丁、㉝五六丁、㉞四三丁、㉟二九丁、㊱二二丁、㊲三六丁、㊳五二丁、㊴三四丁、㊵三〇丁、㊶九一丁、㊷五九丁、㊸五六丁、㊹二一六丁、㊺三三丁、㊻一三三丁、㊼九六丁、㊽九一丁、㊾八二丁、㊿九三丁、①三二丁  
印記・「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」「書籍館印」

#### 【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。

#### 【七八】孟津抄 写年不明 五四冊

紅葉山文庫旧蔵「請求番号特〇一一・〇〇〇一」

本資料は前掲資料同様、『源氏物語』の注釈書『孟津抄』の写本。全五四冊。紅葉山文庫旧蔵。完本であり、一般的に「内閣文庫本」の名前で知られる写本である。

#### 【書誌】

外題・「孟津抄 桐つほ 一（〇夢のうきはし 五十四）」左肩無地料紙

題簽（一七・五糎×三・二糎）に墨書

内題・なし

表紙・代赭色表紙(二七・〇糶×一九・三糶)

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一〇行

字高・二一・〇糶

墨付丁数・①七七丁、②二二六丁、③一五五丁、④七三三丁、⑤七八丁、⑥六三丁、⑦五〇丁、⑧三三三丁、⑨八六丁、⑩八四丁、⑪九丁、⑫九〇丁、⑬七八丁、⑭六三丁、⑮四一丁、⑯一〇丁、⑰四七丁、⑱五五丁、⑲五七丁、⑳五一丁、㉑一一三丁、㉒八五丁、㉓五六丁、㉔四七丁、㉕六二丁、㉖六二丁、㉗一〇丁、㉘四二丁、㉙七四丁、㉚三八丁、㉛七三丁、㉜五三丁、㉝六三丁、㉞一七九丁、㉟一三七丁、㊱五六丁、㊲四三丁、㊳二九丁、㊴二二丁、㊵三七丁、㊶五二丁、㊷三四丁、㊸三〇丁、㊹九一丁、㊺五九丁、㊻五六丁、㊼二一六丁、㊽一三三丁、㊾三三三丁、㊿九九七丁、①九〇丁、②八二丁、③九三丁、④三二丁

印記・「日本政府図書」(①遊紙に蔵書票貼付)「内閣文庫」

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。

【七九】源氏物語抄 寛永年間刊 二〇冊

和学講談所旧蔵「請求番号二〇三・〇〇二四」

本資料は里村紹巴の手による『源氏物語』の注釈書で、一般的な書名では『紹巴抄』として知られるもの。目録書名は内題を採ったものだが、『紹巴抄』という書名がそもそも後世のものと思われ、天理図書館本などから見ても『源氏物語抄』が元の書名である可能性が高い。本資料は寛永古活字版の覆刻と見られる。袋綴。全二〇冊。

『紹巴抄』は、三条西公条の講釈を聴聞した紹巴が、そのとき記した「聞書」を基に整理してまとめたもので、その講釈の様子については『お湯殿上の日記』に記録が残されている。公条は永禄六年に亡くなっており、紹巴はこの頃から「聞書」の整理を始め、永禄八年に『紹巴抄』を完成させた。

紹巴が公条の門に入ったのは天文一〇年代と考えられ、『吉野詣記』には天文二二年の吉野旅行に同道して連歌・和歌を詠みあつた様子が見える。紹巴が連歌師としての地位を確立するのはこの後の頃のこと、公家や武士、僧侶など交遊範囲も広がり、織田信長・明智光秀・豊臣秀吉・細川幽斎らとも親交を結んだ。但し、文禄二年、親交の深かった豊臣秀次が自刃するとこれに連座して蟄居を命ぜられ、晩年は不遇のままであった。

本資料の外題は「源氏物語抄」で、四周双辺の刷題(一七・〇糶×三・五)に墨書されている。第五冊目・第六冊目・第一〇冊目は無地の料紙の題簽(一七・八糶×三・五糶)が用いられているが、外題が判読できないほど表面が磨滅している。いずれの題簽も後補と想像される。

栗皮色の表紙が用いられているが、第一一冊目のみ裏表紙が横刷毛目の表紙で補われている。

【書誌】

外題・「源氏物語抄 卷一（〜卷二十）」四周双边刷題簽（一七・〇糎×三・五糎）に墨書

内題・なし

表紙・栗皮色表紙（二七・四糎×二〇・三糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一一行

字高・一九・五糎

墨付丁数・①七〇丁、②三六丁、③四八丁、④五六丁、⑤五六丁、⑥五六丁、⑦四八丁、⑧五三丁、⑨七八丁、⑩八七丁、⑪三五丁、⑫六一丁、⑬五二丁、⑭四五丁、⑮五三丁、⑯六二丁、⑰八〇丁、⑱五五丁、⑲五七丁、⑳五八丁

印記・「書籍館印」「浅草文庫」「和学講談所」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

近世に入ると『紹巴抄』はいち早く版行され、『源氏物語』注釈の中でも早期に流布したものである。版本としては、寛永古活字版、同覆刻版、無刊記版が知られており、本資料はこの覆刻版に相当する。

【八〇】『岷江入楚』

延宝六年写 五三冊

和学講談所旧蔵「請求番号二〇二・〇三五〇」

本資料は中院通勝の手による『源氏物語』の注釈書『岷江入楚』の写本。

本来は全五五冊だが、本資料の場合は「桐壺」「帚木」を欠いて五三冊。袋綴。和学講談所旧蔵。

『岷江入楚』は中院通勝が諸注集成を目標に一〇年余りの歳月をかけて完成させた注釈書で、『源氏物語』注釈の中でも最も大部なものである。

中院通勝は三条西実枝の薫陶を受け、三条西家の源氏学を学んだが、実枝の没した翌年の天正八年に正親町天皇の勅勘を蒙り、丹後に隠棲することとなった。時の丹後の領主は細川幽斎であり、このときの幽斎との出会いをきっかけに、通勝は、実枝が生前企図していた諸注集成を実現させるべく注釈の編集に着手したと考えられている。

このとき通勝は三条西実条（実枝の孫）から多くの資料を借り受け、注釈に反映させた。そのため、『岷江入楚』は公条や実枝の手による三条西家の諸注を多く載せ、現在では散逸した注記も含み、貴重な資料となっている。

こうして『岷江入楚』は慶長三年に完成、書名は黄山谷の詩に基づき幽斎が命名した。揚子江の源流である岷江が楚に入ると大河となる、つまり、それまでの諸注を集成して大河と為したという意である。序文・跋文によれば、諸注集成は幽斎の悲願でもあった。

京都大学図書館が所蔵する中院本卷子本一卷は通勝の自筆と伝わる。ほか国会図書館が所蔵する寛永二〇年の飛鳥井雅章筆の写本ほか、写本が多く伝存する。

本資料は奥書によれば延宝六年の写で、中院家所蔵の写本から写したも

の。

本資料には六種類の表紙が用いられており、冊次によって異なっている。

【ア】 金茶色唐草文様 (刷) 表紙……①⑥⑪⑬⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔

【イ】 金茶色牡丹唐草文様 (刷) 表紙……②⑦⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗

【ウ】 浅葱色氷割れ (刷) 表紙……③⑩⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙

【エ】 金茶色市松文様 (刷) 表紙……④⑨⑱⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚

【オ】 浅葱色唐花丸文様 (刷) 表紙……⑤⑭⑱⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙

【カ】 浅葱色梅枝文様 (刷) 表紙……⑧⑰⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙

【キ】 香色菊花丸文様 (刷) 表紙……⑫⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚

また題簽の料紙にも二種類があり、冊次によっては題簽を欠く。

【A】 中央無地料紙 (一八・七糎×三・五糎) ……①②③④⑥⑦⑧⑨⑩⑫

⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲

【B】 中央四周双边刷題簽 (一八・二糎×三・〇糎) に墨書……⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕

【C】 欠……⑤⑪⑰⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙

第四四冊目に関しては、題簽が脱落したあとに鉛筆書で「たけかわ」と補ってある。

また第二五冊目には【A】の題簽で「常夏」と墨書されているが、本文は「匂宮」。第二八冊目は【A】の題簽で「うす雲」と墨書されているが、内容は「常夏」で、鉛筆で「とこなつ」と補ってある。このようにいくらか錯簡が見られるが、欠けているのは「桐壺」と「帚木」。第一冊目は「桐壺」の代わりに「行幸」になっている。

【書誌】

外題・各冊とも巻名を墨書、題簽は二種類 (前記)

内題・巻名

表紙・表紙は六種類 (前記)、大きさは各冊およそ二六・八糎×一九・三糎前後

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一三行

字高・二〇・五糎

墨付丁数・①七六丁、②三四丁、③一三〇丁、④七九丁、⑤七六丁、⑥

八九丁、⑦四九丁、⑧一三二丁、⑨一〇九丁、⑩一四丁、⑪一三五丁、⑫

九五丁、⑬七三丁、⑭四九丁、⑮一二丁、⑯五七丁、⑰五九丁、⑱六〇丁、

⑲五〇丁、⑳八九丁、㉑八六丁、㉒六六丁、㉓五七丁、㉔六五丁、㉕三二

丁、㉖一四丁、㉗四四丁、㉘八一丁、㉙八〇丁、㉚三五丁、㉛三二丁、㉜

六二丁、㉝六二丁、㉞二五丁、㉟一〇六丁、㊱四二丁、㊲九丁、㊳七一丁、

㊴九五丁、㊵四一丁、㊶一八〇丁、㊷一五〇丁、㊸六〇丁、㊹八九丁、㊺

八〇丁、㊻四九丁、㊼一三三丁、㊽一七三丁、㊾一七三丁、㊿一八丁、

①一〇一丁、②一〇五丁、③四三丁

印記・「書籍館印」「浅草文庫」「和学講談所」「日本政府図書」

【写年・書写者】

第五三冊目の四三ウに奥書がある。

「此岷江入楚全部五十五帖此度懇望於中院殿秘藏之本伝写之許数年之素願成就者也／延宝戊午秋七月下浣日／洛西隠士 葉川家富 (印)」

これにより延宝六年の書写ということがわかる。

【八一】〔岷江入楚〕 安永年間写 七八冊

紅葉山文庫旧蔵「請求番号特〇九八・〇〇〇一」

本資料は『源氏物語』の注釈書である『岷江入楚』の写本で、全七八冊の完本。『重訂御書籍来歴志』に本資料の記載があり、紅葉山文庫の旧蔵であったことが窺われる。『書物方日記』の安永三年三月十一日条には以下の通り記載あり。

「岷江入楚 七拾八冊／但 右御書物唯今迄御納戸に有之候処／校合被仰付候 右之心得にて取扱候様／に被仰聞候 新規御預けに相成候」

高さ三一・二糎の大型の写本で、虫損がやや見られるほかは保存状態が良い。袋綴。

題簽に書名・巻名が墨書されているが、表紙左下に冊次番号は打付書されている。

【書誌】

外題・「岷江入楚 桐壺一（夢浮橋）」中央薄浅葱色料紙題簽（一三・二糎×四・五糎）に墨書

内題・なし

表紙・砥粉色地紺色霰網目刷表紙（三一・二糎×二二・二糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉九行

字高・二四・五糎

墨付丁数・①六六丁、②八九丁、③五五丁、④六一丁、⑤六一丁、⑥三三丁、⑦六一丁、⑧六〇丁、⑨九三丁、⑩七二丁、⑪三五丁、⑫四一丁、

⑬四三丁、⑭五五丁、⑮五五丁、⑯五九丁、⑰六〇丁、⑱一四丁、⑲六〇丁、⑳六六丁、㉑四三丁、㉒四五丁、㉓六二丁、㉔四四丁、㉕一二丁、㉖五四丁、㉗六一丁、㉘六二丁、㉙四六丁、㉚五四丁、㉛五四丁、㉜四四丁、㉝四二丁、㉞五六丁、㉟五四丁、㊱五一丁、㊲六五丁、㊳一四丁、㊴四六丁、㊵七〇丁、㊶六二丁、㊷七四丁、㊸三六丁、㊹四六丁、㊺四六丁、㊻五三丁、㊼五九丁、㊽五三丁、㊾四九丁、㊿五〇丁、①五〇丁、②五九丁、③三九丁、④二四丁、⑤五四丁、⑥四九丁、⑦三二丁、⑧四四丁、⑨一四丁、⑩三三丁、⑪三三丁、⑫八三丁、⑬六二丁、⑭七〇丁、⑮六六丁、⑯六七丁、⑰三八丁、⑱八〇丁、⑲七五丁、⑳五七丁、㉑五九丁、㉒五七丁、㉓六〇丁、㉔五二丁、㉕五一丁、㉖五三丁、㉗四九丁、㉘四四丁  
印記・「大学校図書之記」「紅葉山本」

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者については不明。ただし、『重訂御書籍来歴志』には「安永年中」と記載されており、『書物方日記』の記載を踏まえても安永年間の書写と考えることができる。

【八一】〔岷江入楚〕 写年不明 五五冊

林家旧蔵「請求番号二〇三・〇〇二五」

本資料は『源氏物語』の注釈書『岷江入楚』の写本で、林家の旧蔵書。のち昌平坂学問所の所蔵となった。全五五冊。袋綴。  
表紙は代赭色と香色の二種。

【ア】代赭色表紙（二七・〇糶×一九・〇糶）……①②④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪  
 ⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟  
 ④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟

【イ】香色表紙（同）……③⑬⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝

題簽は欠けている場合が多く、外題には三種。

【A】欠……①②⑤⑥⑦⑨⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲

【B】打付書……③④⑪⑬⑭⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝

【C】左肩無地料紙題簽（一七・五糶×三・三糶）に墨書「岷江入楚（巻名）……⑧⑩⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟

第三冊目の場合は左肩に打付書で「岷江入楚 はゞき木 二下」とあり、第四冊目の場合は中央に打付書で「空蟬」とある。第一三冊目は左肩に「岷江入楚 す磨」、第一四冊目は左肩に「岷江入楚 あかし」、第一八冊目は左肩に「岷江入楚 ゑあはせ」、第一九冊目は左肩に「岷江入楚 松風」、第二九冊目は左肩に「野分」、第三八冊目は「岷江入楚 よこ笛」、第四一冊目は左肩に「岷江入楚 みのり」、第五五冊目には左肩に「岷江入楚 夢のうきはし 五十二終」とあった。題簽の書式が統一されている一方、打付書の外題は、巻名のみであったり位置も異なっている。これは題簽が失われる都度に補っていったためだろうと思われる。  
 本文の筆跡も複数見られる。

【書誌】

外題・外題は三種類（前記）  
 内題・なし  
 表紙・表紙は二種類（前記）  
 料紙・楮紙

匡郭・無辺無界  
 行数・每半葉九行  
 字高・二一・五糶

墨付丁数・①二八〇丁、②一九三丁、③二〇四丁、④六六丁、⑤二二七丁、⑥一六三丁、⑦一五六丁、⑧一四四丁、⑨八四丁、⑩二〇八丁、⑪二五四丁、⑫二八丁、⑬二四〇丁、⑭一九一丁、⑮一一三丁、⑯九一丁、⑰二四丁、⑱一〇四丁、⑲二一六丁、⑳二〇七丁、㉑九六丁、㉒二〇三丁、㉓一六六丁、㉔一一六丁、㉕一〇六丁、㉖一〇五丁、㉗一二四丁、㉘七七丁、㉙一五二丁、㉚八一丁、㉛一七二丁、㉜一一一丁、㉝二二七丁、㉞二二丁、㉟二〇九丁、㊱一〇六丁、㊲七二丁、㊳四二丁、㊴二〇一丁、㊵四九丁、㊶八二丁、㊷八六丁、㊸五五丁、㊹一三四丁、㊺一〇〇丁、㊻一一二丁、㊼二〇丁、㊽七八丁、㊾三二〇丁、㊿二二三丁、①一六〇丁、②一五一丁、③一七〇丁、④七六丁

印記・各冊一才「林氏蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」  
 各冊表紙・本文末尾「昌平坂学問所」

【写年・書写者】

本資料は写年・書写者ともに不明。筆跡からみて書写者は複数である。

【八三】〔岷江入楚〕 写年不明 五五冊

浅草文庫旧蔵「請求番号二〇三・〇〇二六」

本資料は『源氏物語』の注釈書『岷江入楚』の写本。全五五冊。袋綴。





【八四】〔岷江入楚〕 写年不明 五四冊

水野忠邦旧蔵「請求番号二〇三・〇〇二八」

本資料は『源氏物語』の注釈書『岷江入楚』の写本で、「雲隠説」を欠くため全五四冊。袋綴。

水野忠邦の蔵書印である「引馬文庫」の印と、彼が分類に用いていた勾玉型の「物語」の印が捺してある。明治一三年に政府が購入した。

縹色に布目型押を施した表紙には、銀泥で霞が引いてある。題簽は萌黄色で、外題は定家様で墨書されている。

本文の筆跡は複数認めることができる。

特徴的な点は全冊表裏両方の見返しに、水墨による花鳥画が描かれている点で、画題はすべて異なっている。

全体的に水損が見られる。

【書誌】

外題・「岷江入楚 桐壺（く夢の浮はし）」中央萌黄色料紙題簽（一九・

〇糶×三・五糶）に墨書

内題・なし

表紙・縹色地銀泥雲霞文様布目型押表紙（二七・五糶×一九・五糶）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一六行

字高・二二・〇糶

墨付丁数・①九〇丁、②二一三丁、③二〇丁、④七三丁、⑤五三丁、⑥

一八丁、⑦一七丁、⑧三二丁、⑨七五丁、⑩四八丁、⑪九丁、⑫一〇二丁、

⑬三七丁、⑭五〇丁、⑮三三丁、⑯九丁、⑰三〇丁、⑱二五丁、⑲三六丁、  
⑳二九丁、㉑八一丁、㉒五二丁、㉓四一丁、㉔三六丁、㉕三三丁、㉖三九  
丁、㉗九丁、㉘三二丁、㉙五三丁、㉚三三丁、㉛六〇丁、㉜三八丁、㉝三  
九丁、㉞七一丁、㉟六九丁、㊱三三丁、㊲二二丁、㊳一四丁、㊴六七丁、  
㊵二三丁、㊶二八丁、㊷九丁、㊸六丁、㊹五五丁、㊺三四丁、㊻四九丁、  
㊼五〇丁、㊽二〇丁、㊾六九丁、㊿六六丁、①八二丁、②六四丁、③五八  
丁、④三六丁

印記・「大日本帝国図書印」「明治十三年購求」「日本政府図書」「物語」  
（勾玉型）「引馬文庫」

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者ともに不明。本文に関しては複数の筆跡が見られる。

【八五】〔岷江入楚〕 写年不明 五四冊

浅草文庫旧蔵「請求番号二〇三・〇〇四一」

本資料は『源氏物語』の注釈書『岷江入楚』の写本で、「夕顔」を欠くため全五四冊。袋綴。

本資料の表紙は浅葱色地に金泥で秋草・霞・鶴が描かれた豪華な文様である。題簽も金揉箔の料紙を用いており、見返しにも金切箔。しかしいずれも後補と見られる。本文料紙は虫損が全体的に見られるが修復済。表紙はその修復の際に付されたものと想像される。

蔵書印は「日本政府図書」「浅草文庫」のほかには捺されておらず、浅草文庫収蔵以前の来歴ははっきりしない。  
虫除けのイチヨウの葉が入っている。

【書誌】

外題・「岷江入楚 桐壺 一（〜夢浮橋 五十五）」中央金揉箔料紙題簽  
（二〇・二糶×四・五糶）に墨書  
内題・（巻名）

表紙・浅葱色地金泥花鳥文様表紙（二七・八糶×二一・三糶）  
料紙・斐楮混ぜ漉き紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一六行

字高・二二・五糶

墨付丁数・①九七丁、②一三五丁、③三二丁、④六三丁、⑤四九丁、⑥五七丁、⑦三二丁、⑧九二丁、⑨九二丁、⑩一一丁、⑪一〇五丁、⑫七一丁、⑬四六丁、⑭三三丁、⑮一〇丁、⑯四〇丁、⑰四五丁、⑱四五丁、⑲三三丁、⑳九一丁、㉑六四丁、㉒三八丁、㉓三九丁、㉔四一丁、㉕五〇丁、㉖一〇丁、㉗三二丁、㉘五八丁、㉙三二丁、㉚七〇丁、㉛四六丁、㉜五三丁、㉝二二五丁、㉞一〇四丁、㉟四四丁、㊱二八丁、㊲一九丁、㊳七八丁、㊴三三丁、㊵三二丁、㊶八丁、㊷二三丁、㊸二四丁、㊹四六〇丁、㊺四六丁、㊻五〇丁、㊼二〇七丁、㊽二六丁、㊾二二〇丁、㊿八〇丁、①八四丁、②七九丁、③八二丁、④三二丁

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者は不明。

【八六】窺原抄 写年不明 一三冊

書籍館旧蔵「請求番号二〇三・〇〇三二」

本資料は石出常軒の手による『源氏物語』の注釈書『窺原抄』の写本。  
「桐壺」から「須磨」までの一三冊が伝来する。袋綴。

石出常軒は、江戸小伝馬町の牢屋奉行（「囚獄」）を務める石出帯刀の三代目で、明暦の大火の際に独断で囚人を解放（「切り放ち」）し多くの人命を救ったことで知られている。常軒は隠居後に名乗った号で、名は吉深。

『源氏物語』注釈に着手したのは延宝七年のことで、貞享二年に完成。ほぼ同時期に北村季吟が『湖月抄』を刊行しており、共に江戸時代前期における『源氏物語』受容の様子を伝える資料となった。但し、『湖月抄』に対して『窺原抄』は刊行されておらず、広く流布することはなかった。東北大学図書館には完本である六二冊本の所蔵が知られている。

本資料は書籍館の旧蔵。四周双边の刷題簽（一八・七糶×三・八糶）に巻名が墨書され、中央に貼付されているが、第一冊目のみ、左肩に無地の料紙（一七・〇糶×四・〇糶）で「窺原抄 共十三冊」とある。表紙は錫色（銀鼠色）地に雲母が引いてあり、松葉散らしの文様が刷られている。

【書誌】

外題・「きりつほ 窺原抄（〜すま）」中央四周双边刷題簽（一八・七糶

×三・八糎)

内題・窺原抄

表紙・錫色地雲母引松葉散文様(刷) 表紙(三〇・〇糎×二二・五糎)

料紙・斐楮混ぜ漉き

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一五行

字高・二一・〇糎

墨付丁数・①九一丁、②七四丁、③八一丁、④二八丁、⑤二二〇丁、⑥

一〇二丁、⑦七九丁、⑧七四丁、⑨三四丁、⑩一〇一丁、⑪一〇八丁、⑫

一〇丁、⑬九四丁

印記・「日本政府図書」「書籍館印」

### 【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者は不明。

【八七】湖月抄 延宝元年跋刊 六〇冊

学習院旧蔵「請求番号二〇三・〇〇三二」

本資料は『源氏物語』の注釈書である『湖月抄』の版本。全五四帖に加えて「発端」「系図」「表白」「雲隠説」各一冊と「年立」二冊を付して全六〇冊。袋綴。延宝元年成立。

『湖月抄』は北村季吟の手による『源氏物語』の注釈書で、書名は紫式部が石山寺から琵琶湖に浮かぶ月を見て須磨の巻の着想を得たとする説に

基づく。

『源氏物語』全本文を引用した上で、頭注には諸注から自案まで詳細な注記を引き、傍注には登場人物の心情を解説するなど、これまでの注釈書を最も易しく要領よくまとめたものだといえる。これは読者の理解に大きく寄与し、江戸時代から近代に至るまで最も広く流布した。むしろ『源氏物語』本文の流布にも大きく寄与しており、『源氏物語』を読むことはすなわち『湖月抄』を読むことだったともいえる時代が長く、近世以降の『源氏物語』の普及・研究に大きな影響を及ぼしている。

北村季吟は、養形如庵(三条西公条・実枝に師事)から三条西家の源氏学を学んだ。また九条植通に学んだ松永貞徳にも教えを請い、そのため『湖月抄』は『細流抄』『孟津抄』を中心に据えた上で、『河海抄』『花鳥余情』を用いる構成を採る。『湖月抄』をもって旧注の集大成ともいえ、これ以降登場する注釈書が新注とされる。

季吟は『湖月抄』開版ののち、元禄二年に歌学方として幕府に仕え、以降北村家が幕府歌学方を世襲した。

本資料は紺色表紙(二六・七糎×一九・〇糎)に四周単辺の刷題簽(一八・五糎×三・七糎)が中央に貼付されており、これが元題簽と考えられる。外題はそれぞれ①「□月抄 発端」、②「源氏物語系図」、③「表白」、④「源氏物語年立 上」、⑤「源氏物語年立 下」とあるがすべてツレ。ただし、第六冊目は左肩無地料紙題簽(一九・二糎×三・四糎)に墨書で「源氏物語」とある上に朱書で「湖月抄」と訂正、さらに右下に鉛筆書で「桐つぼ」とある。⑦⑩⑫⑭が後補で中央無地料紙題簽(一八・五糎×三・三糎)に墨書で「湖月抄(巻名)」とある。第二二冊目に関してもこれと似た無地料紙題簽(一九・一糎×三・四糎)が中央に貼付されているが、何も記されておらず、ただ下部に鉛筆書で「絵合」とある。

「桐壺」から「夢のうきはし」までは、全体に墨書・朱書における書き入  
れが見られる。  
また全体的に虫損あり。

【書誌】

外題・(※前記の通り)

内題・「湖月抄」

表紙・紺色表紙(二六・七糎×一九・〇糎)

料紙・楮紙

匡郭・四周单边(二三・〇糎×一七・〇糎)

行数・每半葉一二行

字高・二三・〇糎

墨付丁数・①二七丁、②四六丁、③四丁、④三二丁、⑤三二丁、⑥三二  
丁、⑦五〇丁、⑧二二丁、⑨五三丁、⑩五三丁、⑪二六丁、⑫二二丁、⑬  
一四丁、⑭一四丁、⑮五二丁、⑯五七丁、⑰六六丁、⑱五〇丁、⑲四七丁、  
⑳二八丁、㉑二六丁、㉒七丁、㉓三三丁、㉔二〇丁、㉕二五丁、㉖二七丁、  
㉗二五丁、㉘五六丁、㉙四八丁、㉚一九丁、㉛三五丁、㉜二六丁、㉝二七  
丁、㉞五丁、㉟三二丁、㊱三二丁、㊲一七丁、㊳四一丁、㊴六四丁、㊵二  
七丁、㊶四五丁、㊷一一〇丁、㊸四五丁、㊹三二丁、㊺一七丁、㊻七八丁、  
㊼三二丁、㊽二四丁、㊾一七丁、㊿一五丁、①四五四丁、②四三三丁、③四四  
丁、④九五丁、⑤二〇丁、⑥九九丁、⑦六八丁、⑧七三丁、⑨六〇丁、⑩  
七一丁、⑪二二丁

印記・「大学蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」

【刊年・刊行者】

⑩二一ウには、跋文に「延宝元年冬至月 北村氏季吟」の年記あり。末  
尾には「書林 林和泉／村上勘兵衛／八尾甚四郎／村上勘左衛門」とある。  
「林和泉」は京の出雲寺和泉掾のこと。京都御書房、歌書所として知られ  
る。村上勘兵衛もまた京の書肆で、高野山御用・法華宗御用として知られ  
る。現在の平楽寺書店。八尾甚四郎も京の書肆で、寛文から元禄頃に寺町  
通本能寺前御池下ルに店を構えていた。村上勘左衛門は京堀河通錦小路下  
ルに店を構えていたことが知られる。

【八八】湖月抄 延宝元年跋刊 六〇冊

内務省旧蔵「請求番号二〇三・〇〇三一」

本資料は『源氏物語』の注釈書である『湖月抄』の版本。全五四帖に加  
えて「発端」「系図」「表白」「雲隠説」各一冊と「年立」二冊を付して全六  
〇冊。袋綴。延宝元年成立。

版面を見る限り前掲資料とは同版に見えるが、書肆の一人が八尾甚四郎  
から吉田四郎右衛門に変わっており、後刷かと想像される。

表紙は前掲資料と異なり縹色布目型押表紙(二七・〇糎×一九・〇糎)。  
題簽は四周单边の刷題簽(一八・三糎×三・八糎)が中央に貼付されてい  
る。この題簽は、筆跡や体裁など前掲資料と極めてよく似ているが、巻名  
のほかに巻数も印刷されており、微妙に異なっている。外題は①「源氏物  
語年立 上」、②「源氏物語年立 下」、③「源氏物語系図」、④「雲隠説」、  
⑤「表白」、⑥「湖月抄 発端」、⑦～⑩「湖月抄 きりつほ 一(夢の

うきはし 五十三」となっており、前掲資料とは冊次の順序も異なっている。

なお題簽はすべて元題簽と想像される。前掲資料に比べ、状態も良い。本資料は明治一〇年に政府によって購入された。それ以前の旧蔵者に関することは不明である。

【書誌】

外題・(※前記の通り)

内題・「湖月抄」

表紙・縹色布目型押表紙(二七・〇糎×一九・〇糎)

料紙・楮紙

匡郭・四周单边(二三・二糎×一七・〇糎)

行数・每半葉二行

字高・二三・二糎

墨付丁数・①三二丁、②三四丁、③四六丁、④一〇丁、⑤三丁、⑥二八丁、⑦三三丁、⑧五〇丁、⑨一二丁、⑩五三丁、⑪五三丁、⑫二六丁、⑬二八丁、⑭一四丁、⑮五二丁、⑯五七丁、⑰六丁、⑱五〇丁、⑲四七丁、⑳二八丁、㉑二六丁、㉒七丁、㉓三三丁、㉔二五丁、㉕三七丁、㉖二五丁、㉗五六丁、㉘四八丁、㉙一九丁、㉚二五丁、㉛二六丁、㉜二七丁、㉝五丁、㉞三二丁、㉟三二丁、㊱一七丁、㊲四二丁、㊳三二丁、㊴二七丁、㊵一〇八丁、㊶一一〇丁、㊷四五丁、㊸二二丁、㊹一七丁、㊺七八丁、㊻三二丁、㊼二四丁、㊽二七丁、㊾一五丁、㊿四五丁、①四二丁、②四四丁、③九五丁、④二二丁、⑤九九丁、⑥六八丁、⑦七三丁、⑧六〇丁、⑨七一丁、⑩二一丁

印記・「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府図書」「明治十年購

求」

【刊年・刊行者】

⑥二一ウには、跋文に「延宝元年冬至月 北村氏季吟」の年記あり。末尾には「書林 林和泉/村上勘兵衛/吉田四郎衛門/村上勘左衛門」とあり、前掲資料の刊記とはほぼ同じ体裁で、「八尾甚四郎」の名前が「吉田四郎衛門」と入れ替わっている。

吉田四郎衛門は、吉田屋四郎衛門尉のことで、延享二年『京羽二重』には禁裏御書物所とある。

【八九】湖月抄 延宝元年跋刊 六〇冊

旧蔵者不明「請求番号二〇三・〇〇三〇」

本資料は『源氏物語』の注釈書である『湖月抄』の版本。全五四帖に加えて「発端」「系図」「表白」「雲隠説」各一冊と「年立」二冊を付して全六〇冊。袋綴。延宝元年成立。

版面を見る限り前掲資料(二〇三・〇〇三一)とは同版か。

ただし表紙は前掲資料と異なり紺色表紙(二七・〇糎×一九・〇糎)。題簽は四周单边の刷題簽(一八・〇糎×三・七糎)が中央に貼付されている。この題簽は、筆跡や体裁など前掲資料とよく似ているが、巻数については墨書で後補したものである。外題は①「源氏物語系図」に墨書で「一」が後補、②「源氏物語年立 上」(墨書で「二」が後補)、③「源氏物語年立下」(墨書で「三」が後補)、④「湖月抄 発端」(墨書で「四」が後補)、

⑤〜⑤⑧「湖月抄 きりつほ(〜夢のうきはし)」(墨書で「五」〜「五十八」が後補)。なお、⑤⑨「表白」、⑥⑩「雲隠説」に関しては、墨書による巻数の後補はない。冊次は、前々掲の二〇三・〇〇三や前掲の二〇三・〇〇三とも異なっている。

本資料の各冊冒頭には四周双边の長方陽刻印(三・〇糶×二・七糶)が見られる。旧蔵者の蔵書印と想像されるが、本資料の来歴についてははっきりしない。

【書誌】

外題・(※前記の通り)

内題・「湖月抄」

表紙・紺色表紙(二七・〇糶×一九・〇糶)

料紙・楮紙

匡郭・四周单边(二二・八糶×一六・八糶)

行数・每半葉一二行

字高・二二・八糶

墨付丁数・①四六丁、②三二丁、③三二丁、④二八丁、⑤三二丁、⑥五〇丁、⑦二二丁、⑧五三丁、⑨五三丁、⑩三六丁、⑪三二丁、⑫二四丁、⑬五二丁、⑭五七丁、⑮六丁、⑯五〇丁、⑰四七丁、⑱三七丁、⑲二六丁、⑳七丁、㉑三三丁、㉒二五丁、㉓三七丁、㉔二五丁、㉕五六丁、㉖四八丁、㉗一九丁、㉘二五丁、㉙二六丁、㉚二七丁、㉛五丁、㉜二二丁、㉝三〇丁、㉞一七丁、㉟四一丁、㊱三二丁、㊲二七丁、㊳一〇八丁、㊴一一〇丁、㊵四四五丁、㊶二二丁、㊷一七丁、㊸七八丁、㊹三二丁、㊺二四丁、㊻一七丁、㊼四五四丁、㊽四三丁、㊾一五丁、㊿四四丁、①九五丁、②二二丁、③九九丁、④六八丁、⑤七三丁、⑥六〇丁、⑦七一丁、⑧二二丁、⑨三三丁、⑩一

〇丁

印記・「太政官文庫」「日本政府図書」、不明印記(四周双边長方陽刻印(三・〇糶×二・七糶))

【刊年・刊行者】

⑤⑧二一ウには、跋文に「延宝元年冬至月 北村氏季吟」の年記あり。末尾には前掲資料と同じ「書林 林和泉/村上勘兵衛/吉田四郎衛門/村上勘左衛門」の刊記がある。

【九〇】湖月抄 延宝元年跋刊 二冊

大学校旧蔵「請求番号二〇三・〇〇五三」

本資料は『源氏物語』の注釈書『湖月抄』の延宝元年跋刊本の残欠で、「源氏物語諸卷年立」の二冊のみ。袋綴。

表紙は紺色表紙(二七・〇糶×一七・〇糶)で、題簽は金揉箔を施した料紙(一八・九糶×三・二糶)を中央に貼付している。外題は①「源氏物語 年立」(※「表白」に二重線で訂正が施してある)、②「源氏物語 年立」とそれぞれ墨書してあるが、冊次は順序が本来とは反対になっており、第一冊目が「梅枝」から始まっている。

【書誌】

外題・(※前記の通り)

内題・「源氏物語諸卷年立」

表紙・紺色表紙（二七・〇糎×一九・〇糎）  
料紙・楮紙

匡郭・四周单边（二三・三糎×一七・三糎）  
行数・每半葉一二行

字高・二三・三糎

墨付丁数・①三四丁、②三一丁

印記・「大学校図書之印」「浅草文庫」

【刊年・刊行者】

刊記欠。版面から見て延宝元年跋刊本の残欠。

【九一】源註拾遺 写年不明 七冊

和泉伯太藩渡辺家旧蔵「請求番号二〇三・〇〇三五」

本資料は契沖の手による『源氏物語』の注釈書『源註拾遺』の写本。全七冊。袋綴。

『源註拾遺』は『湖月抄』を基礎に、その誤りや不備を訂正することを動機として編まれたとされる。多くの引用を基に自説を「今案」として述べるが、その姿勢は実証主義的・用例主義的と指摘され、『湖月抄』以前の「旧注」とは一線を画す内容を持つ。これ以降、国学者の手による「新注」がつくられることになるが、その先駆けと位置付けられることが多い。

本資料はその江戸時代後期の写本で、明治一二年に政府によって購入されたもの。「嵯峨支流／渡辺文庫」（四周双边長方陽刻印、四・八糎×二・

〇糎）の印が各冊一丁目と末尾に捺印されていることから、本資料はこの蔵書印を用いていた和泉伯太藩主の渡辺家の旧蔵であったことがうかがえる。

【書誌】

外題・「源註拾遺 一（七七）」左肩無地料紙題簽（一九・三糎×四・〇糎）に墨書

内題・「源註拾遺」

表紙・浅葱色布目型押表紙（二七・五糎×一九・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉九行

字高・二三・五糎

墨付丁数・①六八丁、②五九丁、③五一丁、④五三丁、⑤五三丁、⑥三七丁、⑦七七丁

七丁、⑦七七丁

印記・「明治十二年購求」「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「嵯峨支流渡辺文庫」

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。筆跡、体裁などから見て江戸時代後期の写本と推定される。



【九二】源氏物語新釈 写年不明 二五冊

内務省旧蔵「請求番号二〇三・〇〇三六」

本資料は賀茂真淵の手による『源氏物語』の注釈書『源氏物語新釈』の写本。袋綴。「明石」「総角」「手習」を欠き、また「惣考」「別記」を加えて全二五冊。

『源氏物語新釈』は、自跋によれば、主家の田安家の求めに応じて作られたもので宝暦八年の成立。ただし、段階的に成ったと見られ、現在の形になった時期ははっきりしない。田安家旧蔵の『湖月抄』に真淵の書き入れがあることから、元は『湖月抄』本文の注記として成立したと見られる。契沖の『源註拾遺』を受けて成立しているが、独自性も強く共に新注の画期を為す。

本資料は「内閣文庫本」として知られる写本。表紙は砥粉色の檀紙を用いており、縮緬状の皺がある。外題は左肩に打付書で、巻名は中央に墨書されている。

【書誌】

外題・「源氏物語新釈」左肩打付墨書

内題・「源氏物語新釈」

表紙・砥粉色表紙（二六・七糎×一八・七糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・每半葉一一行

字高・二〇・三糎

墨付丁数・①三六丁、②六三丁、③一〇一丁、④八七丁、⑤一一九丁、

⑥五六丁、⑦二三丁、⑧一〇九丁、⑨一〇六丁、⑩九七丁、⑪七九丁、⑫八八丁、⑬九六丁、⑭七七丁、⑮九五丁、⑯一〇九丁、⑰九四丁、⑱五五丁、⑲六九丁、⑳九五丁、㉑九一丁、㉒八〇丁、㉓六一丁、㉔五四丁、㉕七〇丁

印記・「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府図書」

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。筆跡、体裁などから見て江戸時代後期の写本と推定される。

【九三】源氏物語玉の小櫛 刊年不明 九冊

町田久成旧蔵「請求番号二〇三・〇〇三三」

本資料は本居宣長の手による『源氏物語』の注釈書『源氏物語玉の小櫛』の版本。袋綴。全九冊。

『源氏物語玉の小櫛』は、宝暦七年から約四〇年に及んで行われた宣長の『源氏物語』講義をまとめたもので、序文によれば、石見浜田藩主松平康定の依頼によるもの。寛政八年に完成し、同一一年に刊行された。契沖の『源註拾遺』を踏まえて精査した内容を持ち、これ以降の注釈が主に「新注」と称される。『源氏物語』の本質を「もののあはれ」と説き、それまで仏教・儒教的価値観で解釈されてきた『源氏物語』に新たな解釈を与えた。

本資料はおそらく寛政一二年版の後刷。刊記には発行書肆として、江戸・大坂・名古屋の版元が一三箇所載る。

本資料は「町田久成献納之章」の朱印が捺されていることから、町田久成旧蔵書であることがわかる。町田久成は書籍館の初代館長であり、書籍館創設に際して蔵書を寄贈したといわれ、本資料はその際に書籍館の所蔵となった。

外題は左肩に四周双边の刷題簽で出しているが、第六冊目のみ欠けており、同じ大きさの白紙の題簽が貼付されている。

【書誌】

外題・「玉の小櫛」左肩四周单边刷題簽（一九・三糎×三・六糎）

内題・「源氏物語玉の小櫛」

表紙・縹色表紙（二五・七糎×一七・八糎）

料紙・楮紙

匡郭・四周单边（一九・五糎×一四・二糎）

行数・每半葉一〇行

字高・一九・五糎

墨付丁数・①四四丁、②六三丁、③四二丁、④四〇丁、⑤四七丁、⑥五

八丁、⑦五四丁、⑧四二丁、⑨六〇丁

印記・「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「町田久成献納之章」

【刊年・刊行者】

⑨六〇才（裏見返し）に刊記あり。

「発行／書肆／江戸日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛／同日本橋通二丁目 須原屋新兵衛／同浅草茅町二丁目 須原屋伊八／同日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛／同芝神明前 岡田屋嘉七／同両国横山町三丁目 和泉屋金右衛門／同芝神明前 和泉屋吉兵衛／大坂心斎橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛

／同心斎橋通安土町 河内屋和助／同心斎橋通博芳町 河内屋茂兵衛／同心斎橋通安堂寺町 秋田屋太右衛門／京都麩屋町通姉小路 俵屋清兵衛／尾州名古屋本町通七丁目 永楽屋東四郎」

【九四】源氏物語玉小櫛補遺 文政三年刊 二冊

内務省旧蔵「請求番号二〇三・〇〇三四」

本資料は鈴木胤の手による『源氏物語』の注釈書『源氏物語玉小櫛補遺』で、本居宣長の『源氏物語玉の小櫛』を補う目的で編まれたもの。二巻二冊。袋綴。

鈴木胤は寛政四年に本居宣長に入門し、その講義を受け、時に自ら松坂へ赴き薫陶を受けた。『源氏物語玉小櫛補遺』は、宣長の没後、その宣長の説を補う目的で編まれた。ただし、補説のみならず、独自の説や宣長説への反論も少なくない。本書が刊行されたのち、文政四年に胤は尾張藩御儒者となり、多くの功績を残している。

本資料は内務省の旧蔵で、それ以前の来歴についてははっきりしない。第一冊目の裏見返しに「書物屋 名古屋伝馬町二丁目 美濃屋清七」の広告（一六・五糎×一一・八糎）が貼付されている。四周单边の匡郭（一四・五糎×九・八糎）内に、「蛇頂石」「紫金錠」など薬の広告が載る。美濃屋清七はおそらく本書の販売を担ったと見られ、当時の書肆に多くあったように、薬屋を兼業していたことが窺われる。

【書誌】

外題・「玉の小櫛補遺 上(下)」左肩四周单边刷題簽(一八・七糎×三・三糎)

内題・「源氏物語玉小櫛補遺」

表紙・縹色表紙(二六・〇糎×一八・二糎)

料紙・楮紙

匡郭・四周单边(一九・〇糎×一四・三糎)

行数・每半葉一〇行

字高・一九・三糎

墨付丁数・①三〇丁、②二七丁

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

②二七ウに以下の通り刊記あり。

「文政三年庚辰春／新刻／尾張／はなれ屋蔵板」

「離屋」は、鈴木胤の号で、師の宣長の号である「鈴屋」を模して名乗ったものである。前掲資料には欠けているが、『源氏物語玉の小櫛』の版には、「すずの屋蔵板」とあるものがある。

(調査員)

